

「日本の社会科学はこれでいいのか？」講演記録
電通総研 Human Studies Forum 第9回 3/27講演

Human Studies Forum (第9回)

「日本の社会科学はこれでいいのか？」

プレゼンテーション

演者：東京工業大学大学院社会理工学研究科教授

橋爪 大三郎先生

司会：京都大学大学院人間・環境学研究科助教授

大澤 真幸 先生

【杉之尾(事務局)】 それでは皆様、Human Studies Forum 第9回をこれから始めたいと思います。本日のテーマは「日本の社会科学はこれでいいのか？」です。これまでHuman Studies Forum は21世紀の知識社会ということで、きょうを含めて9回やっていますが、まさしくきょうのテーマは今後の知識と、社会との関係について討論をします。きょうはこの難しいテーマに対して橋爪大三郎先生にプレゼンテーションをお願いすることになりました。司会は橋爪先生のご要望がありまして大澤先生をお願いしてございます。

これまで教育、金融、政治などについて取り組んで参りましたが、日本の社会はこの10年、わかっているけれどもなかなか変えることができないということがいろいろ言われてきたと思います。その根本にはわれわれの知識に何か問題があるのではないか、そのような問題意識があって、きょうのテーマを決めさせていただきました。それでは大澤先生がこられましたので、司会のほうにバトンタッチをしてHuman Studies Forum を始めたいと思います。それでは大澤先生よろしく申し上げます。

【大澤】どうも皆さん、今晚は。私もここに来るのはずいぶん久しぶりですが、きょうは皆様ご存じの、私にとっては10年上の先輩になりますけれども橋爪先生に「日本の社会科学にどこに問題があるのか」ということでお話をいただくということになりました。きょうはいつもより非常にメンバーの数が多いです。ですから、最後の議論もなかなか大変かとちょっと恐れていますけれども、でもそれは楽しいことになると思いますので、皆様も楽しめると思います。

では時間もあれですので、さっそくやっていただきたいと思えます。お願いします。最初に1時間くらいやってから討論という形にします。

【橋爪】ご紹介いただきました橋爪です。ちょうど上野さんもお見えになったところで、1時間ほど「日本の社会科学はこれでいいのか？」というテーマで話題提供の意味でお話をしまして、そのあと皆さんから討論をいただくという順序で進めていただく段取りになっていると伺っています。なるべく時間を守ってお話しします。

きょうは大変錚々たる皆さんを前にお話をすることになりますので、あまりくだくだしいことは必要ないかと思えますけれども、準備をしていたらちょっと中身が多くなりすぎてしましまして、いつも私が考えていることとは必ずしも言えないですけれども、スケッチのようなものだというので報告をお聞き下さい。年来の持論ではありますがリテールが新しくなっているということです。お手元にレジメが1枚見開きで1から4までありまして、それを順番にお話していきます。

「日本の社会科学はこれでいいのか?」。私は社会学を担当しているので社会科学者の端くれですけれども、こういうテーマをいただいたのだったか私が言ったのか忘れましたが、こういう題で考えるということになりました。どういってお話をしようかと思っているいろいろ考えていたのですが、あまり細かな話をするよりも少し根のところを話したほうがよいのではないかというように掘り下げていくことにしました。

直観的に私が大学生になってからいままで毎日思っていることは「日本人の言葉は何でこんなに軽いんだろう」という軽さの感覚です。この軽さの感覚というのをうまく言うことは難しいですけれども、俗に言えば言った通りに現実が動かないとか、あることを言っていたくせに直ぐ別なことを言ってみたりするとか、そういうことから始まっていろいろあるんですけれども、そういう軽さの感覚というのがまず先にくるのです。

軽さの感覚であるところで学問というものを、社会科学のようなものをして、それで何かうまくいくような気が私はなかなかしないので、これは私の直観的な感じですけれども、軽く聞こえるときにはまず非常に眉に唾をつけて、そこから先、真剣に聞いていくということをなかなかできなくなってしまう。逆に「なぜこのように軽く言葉が出てくるんだろう」というように私は社会学的な対象としてある社会科学者のことを考えてしまうと、そのような習性がありました。つまりひねくれ者なのです。その感覚を出発点にして、きょうのことは話してみたいと思います。

いくつか材料を考えたのですが、1つは政治家の失言の問題がありまして、この問題を加藤典洋さんが取り上げておられます。「失言とべし見」。べし見というのは渋っ面をしたお能のお面という意味だそうですが、そういう論文が『可能性としての戦後以後』という本の中に収録されていて、初筆はもっと前だと思います。それから『日本の無思想』という本の中にも再び取り上げられています。

この政治家の失言の背景にはタテマエとホンネという二元法があって、これは日本人の言葉使いの古典的な例だと信じられているが、加藤典洋さんの調査によると全然そうではなくて、1970年から「タテマエというのは本心と違ったうわべの言葉、ホンネというのは隠されて言っはいけない内面の心」という現在の用法が始まった。わずか20~30年の歴史しかない。

その用法が始まったのと同時に、日本的な政治家の失言というのが始まるようになって、ある大臣が「太平洋戦争は正しかった」と

か「韓国の併合は合法的だった」とか、そのようなことを発言してしまつて問題になる。それで責任をとる形で発言を撤回する。しかし本人は大変残念で、実はそうではなかったという形で信念を変えていないように見えるのですが、その結果、辞職になったりするという一連の事件が起こってくるのです。

そこで起こっているのは、本人は状況に従つて発言を撤回しているのだけれども、信念は変わっていないのであると新聞も一般国民も思っているという共通理解なのです。ただ、自分の本心を不適当な時期に発言してしまつたというように皆が了解するという現象なのです。

彼はここにとどまらずに、加藤さんは非常にそれを掘り下げてきまして、実はホンネと言われるものも本心や信念や確信というものとまた違うのではないかと展開していつて、そこに戦後の知識のあり方の1つの自己欺瞞というものまで掘り下げていくのですが、これは非常に複雑な問題なのである程度カットします。興味のある方はぜひもとのものを読んでいただきたいと思います。

これは説得力があるんですけども、私が「はてな」と思ったのは、戦後の自己欺瞞というのはあるかもしれないが、それだったらアメリカに負ける前の戦前の言論というのはそんなに自己欺瞞がなくまっとうであつたらうかと考えてみるわけです。そうすると、そうも思えないわけです。別な例を引きますと山本七平さんが『『空気の研究』の研究』という本を書いておられるますが、これは戦前の陸軍の中で「必勝の信念」とか「討ちてしままん」とか玉砕とかいった言論が現実と乖離していきながら組織を動かして、どこまでもどこまでも大きくなって、最後に破産してしまうという陸軍の内部で効力をもつた言語についても社会学的な分析なのです。私はこれは非常に面白いなと思つました。

ということは、戦前には戦前のやり方で現実から乖離していく言葉の使い方というのが日本の社会を動かしていたということが言えると思います。戦前の問題点と戦後の問題点を私たちはいま、両方

ながらに認識できるんですけども、私がそこでさらに非常に問題だと思つるのは、戦前に生きていた言語と現在、効力のある言語が無関係であるのに、これを共通に取り上げる言論の場、あるいは思考の方法、枠組みというのがなくて、現在、効力を持っている言語というのは戦前の言語と切断したり、それを忘却したりするところになり立っているのではないかという形で受け止めると、いま、われわれが、例えば陸軍が盛んにキャッチボールをしていたような空体語と言うのですけれども、実体がなくて言葉に飲み込まれることによって自分の商売がなりたつというような言葉を使っていないと、どのように論証できるだろうかという課題として受け止められるわけです。

現実と言葉がきちんと対応するということは実は社会科学の出発点で、自然科学だったら言葉の定義や何かから始まっていくと思つますけれども、それに当たる作業なわけです。それに当たる作業が非常に困難であるという直観が私にはあります。

次の2)にいけますと、そこで皇国史観という話になるのですが、ハーバードに行きましたら奈良女子大学の小路田泰直さんという方がたまたまいらしていつて、何かの話で私は皇国史観の話をして、皇国史観というのは世論で大変に変なものなんだけれども、しかし皇国史観というのはそんなに過去のものなんだらうか。戦後、いろいろ新しい歴史観があるけれども皇国史観と正面から対決して論争して、皇国史観の誤りを実証し、そして打倒して過去のものとしてしまつたのだらうか。

そうではなくて、皇国史観は端的にGHQに禁止されて言つてはいけないことになり、過去のものとしてただけではないのかなと思つていたものですから、皇国史観を打倒するということは、あたかもオウム真理教がつかまつた後、オウムの教義を批判しなければいけないのと同じように、やはりやらなければいけないことではないかという話をしたら、その方が皇国史観の研究者だったのです(笑)。そして「そうだ、そうだ、その通りで、私は研究していま

す」という話でいろいろお教を伺ったわけです。

彼は最近「邪馬台国と日本人」という本を書かれまして、これは大変よい本だと思いますが、凡庸の題がついているために少しも売れていないと思いますが、実は皇国史観とマルクス主義史観とがアイソモルフィックであるという、大変歴史学会では革命的なというか鼻つまみになるような本ですけれども、説得力がありました。

邪馬台国の話はどうして出てくるかという、こういうストーリーです。まず明治政権ができたときに近代国家ですから歴史を書こうと思った。そこで大日本史を紀伝体で書かれているものを編年体にすれば日本史になるだろうと思って作業をやり始めたというのです。ところが歴史記録というのは中国側の資料から始まるわけで、日本の古代史から立て直していくというのは大変難しい問題で、方法的にいろいろ難しいところがあったのです。ごちゃごちゃしているところに明治政府の方針として「日本の歴史は天照大神から始めなさい」という至上命令がかかった。これは議会の開設と関係があるのですけれども、天皇の統治権が悠久の歴史から日本で承認されていたと主張する必要があったので、そのようになったのです。

大日本史というのは神武天皇から始まっているのです。ところが明治の国史というのは神武天皇からではなくて天照大神から始まらなければならなくなった。そこで実証歴史学としては大変に困るわけで、そんな証拠などは何もないわけです。真面目な歴史学者は天照大神についていろいろ研究したのですが、白鳥倉吉さんという方がいろいろ研究したところによりますと、日本の天照大神なり日本の古事記なり日本書紀なりの記述というのは中国の思想の影響下に形成されたものなので、天照大神だとか、その前の一人神だとか何だとかというのは道教とか儒教などのテキストの読み替えによってでき上がっている、つまり、これではどうしようもないわけです。

そこで白鳥倉吉さんはこのように実証史学と天皇の統治権とを両立させるためにどうしたらよいかと考えて、邪馬台国が九州にあっ

たという説を立てたと小路田さんはおっしゃるわけです。どうしてかと言うと、歴史上、最古の記録があるのは日本について邪馬台国です。この邪馬台国がもし奈良県にあったのであれば日本の中心的な政権がそのときあったことになってしまいます。それが中国の影響下にあったという意味になってしまうのです。

ところが、もしそれが九州にあれば文字史上では九州までしか辿れない。ということは、九州の影響の及ばない大和地方にモモジ(?) 社会の天皇が統治する天照大神の子孫の朝廷というものが存在したからであると間接的に実証できるということを念頭に置いて、白鳥倉吉さんは九州説というものを立てた。このようにその動機を理解して、そのあと邪馬台国論争が起こるんですけれども、そういう議論です。これが皇国史観の1つのアイデアの基になっていくわけです。

次のところですが、皇国史観というのは、天皇の統治権、天皇との関係で個々の志を貫いていく個々人の歴史ということをつなぎあわせていくストーリーですけれども、そういうことでそのストーリーが途切れているというか、ストーリーの途切れ目の象徴として戦後に残っているものが靖国神社の問題ですけれども、現在、私たちは皇国史観を否定しましたから靖国神社というものは戦後の中で位置づかないという問題で残っています。

これをつなげようとする努力というのは文学者の間でもいろいろあって、例えば大岡昇平さんのミンドロ島体験にもとづくいろいろな文学的作業とか、それから、ミンドロ島というのはわりあいのんびりした戦場だったのですが、隣のレイテ島が大変に厳しかったので収容所で一緒になったレイテ島の生き残りの捕虜の人たちから証言を受けた「レイテ戦記」というものも書かれています。

山本七平さんもやはりフィリピン戦線にいたのですけれども、彼はレイテ島ではなくてルソン島に工兵将校として行ったのですが、彼はそこで最初の作品だと思えますが「一下級将校のみた帝国陸軍」という組織分析から始まって、戦前の、そして戦後につらなる

日本人の行動様式のようなものを分析しているわけです。吉田さんの仕事もあります。このような仕事はあるんですけども、これは社会科学的にきちんとした形で再構成されたものではなくて、多分に文学的直観によっている作業が多いと。そういうものが断片的でありまして、むしろシュウユウ(?)にはなっていないのではないかと思います。

そこで、また次の材料ですけれども、最近、ちょっと小説をまとめて読む機会があったのですが、村上春樹さんの「ねじまき鳥クロニクル」とか、吉本ばななさんの「アマリタ」という小説の中に、突然戦争の死者が出てくるというあたりの記述があって、私は非常に興味をひかれたのです。これは1994年から1995年にかけて書かれた小説で、ちょうど冷戦が終わって日本の連立政権という枠組みがごちゃごちゃしていた時期だと思いますけれども「ねじまき鳥クロニクル」は1巻の終わりの辺りに突然、ノモンハンが出てきて、いろいろな奇縁で知り合った主人公の知り合いの老人が実はノモンハンの体験者であって、そこで一緒にいた人間が皮を剥がれてしまったというエピソードが語られて、それが2巻、3巻につながっていくのですけれども、そのノモンハンというのはソ連の情報将校が命じて蒙古の兵隊に日本人の皮を剥がせてしまうというプロットです。

これは村上春樹さんがどこまでよく考えたのかわからないのですが、蒙古人という異人が日本人の皮を剥いでしまうという、ちょっと差別的なストーリーになっているのですけれども。私は中国の小説も読んだことがあります、中国にも皮剥ぎの小説があって、10年ぐらい前に流行ったので「紅高粱」というのがあります。そこでは日本兵が命じて中国人の肉屋を使って中国人の皮を剥ぐというようになっていて、こちらのほうが実際にありそうなストーリーだと思います。

もう1人の吉本ばななさんの「アマリタ」というのは、吉本ばななさんの小説にはしばしば憑依をしたり夢をみたり、そういう超能力を持っている人々が出てくるのですが、他の小説と違って「アム

リタ」の場合だけ、その超能力というのが戦死者の霊と通底するのです。何かの事情でサイパン島に行く。そして主人公が知り合ったサイパン島のご夫婦のうち奥さんのほうが歌手なんですけれども、その歌手の方が素晴らしい歌を歌う。あとでその歌手の人に聞いてみると、それはサイパン島にいる2万人の戦死者の人たちの霊が寄ってくるのがわかって、それを背景にその人たちに対して歌うと、その歌が素晴らしい迫力になる。本人は何を歌ったか覚えていないぐらいの状態になるのですけれども、そういうトランス状態というものがあるんだという想定なのですから、それがサイパンの死者ということになってくるわけです。

多分この小説家たちはあまり詳しい背景まで十分考えた上でこういうプロットを選んでいるのではないと思います。しかし、これがたくさん売られている小説の中の1つの挿入されているエピソードであるということは、多分「読者、同時代人の説明されない途切れたままの歴史との切断感、負い目というのが解決したら何か自分の無意識というか、生きにくさというか、現在の視点というのが照らしだされるのになあ」という思いをある意味でアンテナで反映しているという意味合いがあるのではないかと思います。自分の知らない他者、あるいは自分の先祖に対するこういう感覚が空間的なよそに向かわないで、時間的な過去に向かっているという点に興味を持ちました。これはこれです。

ですから、こういう潜在的な何か整理のつかなさというのは、1980年代なり1990年代なりいろいろ消費社会状況になっているわけですから、その中で現に生きている人々の心理の底に通底しているのではないかなと思うわけです。

この無意識を退治していくためには過去について十分な情報を得た上で、ある明確なイメージを持ち、特に過去の思想や言論と現在をきちんと整合させる。あるいは整合しないのであれば対立するという形で関係をつける。こういう作業をさぼるならば、この形の無意識は何回でも生み出されているのではないかなと私は思ったわけ

です。

3番目です。次に私が去年出した本で「言語派社会学の原理」という冒頭に書いてあることをご紹介しますと思います。社会学者として大変私が常日頃困ることは、社会科学の概念装置というのはヨーロッパで生まれたために、ヨーロッパの特に19世紀の社会などにぴったり当てはまるようにできているわけです。経済学などは20世紀のアメリカにぴったり当てはまるようにできたりなどするわけですけれども、そういう当てはまりのよさというのは欧米の社会学者にとっては大変都合がよいもので、都合が悪い社会があるということはあまり意識されていないものなのです。

しかし、私からするとその概念装置というのは日本の現実を切るのに大変具合が悪いものになっている。それで困っていてもしょうがないので、この関係を考えるのにこう考えてみました。つまり、社会科学というのは普遍性を主張しているけれども、実は西欧ローカルなものである。それは西欧ローカルで、しかも19世紀という歴史的、空間的に特定されているものなんだと主張する権利がわれわれにはあるだろう。われわれからそのように主張するということは、それを上回るもう少し普遍的な記述装置が提案できるということにならなければ意味がないのですが、そういう形で提案していくというのが、とりあえず日本人が社会科学をやる場合の持ち味であり醍醐味ではないかと。そういうことをやっている本です。

その観点から従来の社会科学というのを見ても、まずこういう立場があります。外来の概念系や理論にあわせて日本社会の現実を適応して分析しようと思うのですが、あわないところがある。あわないのは日本社会の現実が悪いということで、それを批判するという立場あるいはスタイルです。これはマルクス主義を含めて、あるいはモダニストを含めてよくあるやり方です。

それに対して必ず反動形成が起こるわけであって、それは日本社会の現実に合わせて外来の概念系議論を批判する立場で、これは明確に批判するということは大変努力があるので普通はやりませんが、

暗黙のうちにぐちゃぐちゃとやっている。この自民党的暗黙知というのがあるとすると、いつでも世界標準に対して何か文句を言いながら日本流のやり方をするんですが、これは反動形成ですね。この2つのどちらかなのです。

この2つのどちらも発展性というのではないのです。この2つを超えていくということがとりあえず社会科学の課題かと。戦前は西欧基準と日本社会のギャップというのは十分大きなものがあったので、この2つの対立は大変明確で、特に後者の自民党的暗黙知というのが言語化されて皇国史観とか何かそのようなものになったと思います。よかれあしかれ。

しかし戦後、日本は1歩か2歩か知りませんが西歐的現実のほうに歩み寄ったことになったので、自民党的暗黙知というのはまさに暗黙のまま人々の間に分け持たれるという状態になったのではないか。そのぶん輸入学問はやりやすくなって、政治学とか経済学とかそういう社会科学というのは、いまや民主戦後の日本であれば、かなり妥当するわけです。細部において妥当しないわけですし、いろいろな問題が起こってくるわけです。そういう状態になっている。

そうすると輸入学問でもけっこう商売がなり立つので、私のようなことを考えている人は少数派なのかもしれません。しかし私から言わせれば、それでも西欧ローカルな問題というのを見据えていくということは大事であり、日本社会の現実や、あるいは他の社会を持ってきてももちろんよろしいのですが、社会のより普遍的な現実を見る、記述もめざすという学問的努力が必要だと。

1件は終わりです。本当はここで終わってもよいですが、せっかく用意してきましたので……。2の「プレ近代思想の系譜学」というわけですが、皇国史観がどのようにできてきたかというようなことをちょっと勉強してみました。皇国史観のいい加減さ加減というのを、説得力のほうはわかるのですが、いい加減さ加減というのを同時に突き合わせないといけないですが、そのために敵情を視察しているわけです。

最近、私は吉田松陰の「講孟劄記」という本を読みました。これは講談社から学術庫で出ているものですが、明治維新を動かした志士たちに影響を与えた吉田松陰がどのようにテキストを読んでいるのかなという点で注目されたのですが、ちょっとびっくりしたのは最初に孔子と孟子が批判してあるという点です。儒学の本を読むときに孔子と孟子の批判から始まるということでは、そもそも儒学にならないと思いますが、そのように始まっています。

なぜ孔子と孟子を批判していたかと言うと、孔子と孟子は自分の国を離れて外国に遊説に行っている。もし受け入れられれば外国でその国の臣下になるつもりだったのであろう。このように君主に対して忘恩の人間が説いている教えを真に受けることはできないのである。わが国はそのような伝統がなく、皆、天皇の臣下として頑張ってきたのであるから、わが国のほうが儒教の精神を伝えているのであるということで、これは文化的誤解にもとづくものだと思いますが、しかしナショナリズムの宣言、中国と日本の関係なのです。

そういう奇妙な本なのですが、吉田松陰は当時、獄中につながれていて死を覚悟していた。たまたまそのあと許されて3年ほど松下村塾で教える機会があり、後進を育てて、あと安政の大獄で殺されてしまったと思いますけれども、そういう人間というのは牢屋に閉じ込められると、ヒットラーもそうですけれども大変に創造力が刺激されまして、何か奇妙な本を書く場合があるわけです。

この吉田松陰の孟子に対するコメントをずっと読んでいきますと、1つ中心になるものがあって、それは忠孝一如という考え方だと思いました。「忠」というのは主君に対する義とも言いますが忠誠心のことで、「孝」というのは父親・母親、家族の内部での忠誠心のことで、この2つというのは儒教では違うものです。ときにはこれは矛盾するわけです。しかしわが国においてはこれは矛盾しない。こういう考え方を忠孝一如と言うのですが、吉田松陰において一番大事な概念は、まだ半分しか読んでいないので後半にもっとよいこと

が書いてあるかもしれませんが、私が読んだところでは一番これだと思えます。

どのように書いてあるか。例えば「凡そ君と父とは其の義、一なり」とか、このようになっているわけです。吉田松陰が忠孝一如という儒教のオリジナルなテキストにはないアイデアをここで採用して明治維新のイデオロギーにしているのですけれども、これがいったいどこから流れてきたのかなと、いま系譜をたどろうと思っているのですが、いまたどり中ですが、1本の線は例えばこのような感じですか。

まず、江戸幕府ができてしばらくしてから山崎闇斎という儒学者が出てきまして、この人が湯武放伐論という主張をする。これは水戸学の流れをくむオリジンの1つなので注目すべき人間だと思いますけれども、この山崎闇斎に注目すべきだというアイデアは山本七平さんの本で勉強したのです。孟子の学説ですけれども湯武放伐論というものがあります。「湯」と「武」というのは王様の名前で、殷の湯。これは殷という王朝をつくった最初の王様です。その前に哥という王朝があったのですけれども、ちょっと王様の名前を……。厥王だったと思います。それから「武」というのは周の王朝の初代の王様ですけれども、その前にも悪い王様がいて、2回同じことが繰り返されているので最初のは伝説的な可能性が非常に強いです。

酒池肉林とかそのような風紀が乱れ、国政を顧みないというひどい状態になるわけです。そこで臣下であるか、あるいは在野の人であるかが、この王様を排除して次の王朝を起こすという武力革命を起こすわけです。この武力革命のことを湯武放伐と申したわけですが、湯武放伐を肯定するのか否定するのかというので儒学の中で論争があると。もし肯定すれば条件次第で主君に対する忠なり義というものは効力を持たない。つまり反逆してよいことになりま。これを無条件に認めてしまいますと大変です。

また、もしこれを絶対に認めませんと、よくない君主がいた場合はどうなるかということになります。これは武力革命の正当化の論

理なんですけれども、孟子はこれを肯定しているんですけども、山崎闇斎は主君を絶対化するために湯武放伐を絶対に否定するという論理をまず持つてくるという、その学説をオリジンにつくった人です。

その弟子の浅見綱斎という人がいまして、普通は「靖献遺言」という本が代表作になるのですが「忠孝類説」という本がありまして、これは日本史をいろいろ津々顧みまして、個々の人間の儒教的動議性を批判的に検証していく。

ここで一番大事なものは次の栗山潜鋒の「保建大記」という本の中に出てくる例ですけれども、源氏の頭領であった義朝が法王の命令で父為義を殺害しているという事件があるんですけども、これを批判している本です。栗山潜鋒という人は大変な天才で13歳のときに「保建大記」を書いて、大日本史の編集長のような人に選ばれたという人ですけれども、彼の学説に受け継がれ、その次の2代目の編集長である三宅観瀾という人に以後ずっと水戸学になっていって、最後に吉田松陰になってくるという系譜の系列が一応あります。そして吉田松陰のあと、勤皇の志士になっていくわけです。

次の仮説ですけれども、忠孝一如というのはどういう社会学的意味合いがあるかと言うと、自分の帰属集団を絶対化するという意味があります。その帰属集団はあるときには藩であり、あるときには日本国なのであるんですけども、勤皇の志士の場合は藩を相対化します。幕府を相対化しますので脱藩することになります。しかし、そのときに勤皇の草莽の志士となって日本国のメンバーになり、それが絶対化されるということです。帰属集団を絶対化することが行動の原因なのですが、帰属集団を絶対化するならば言語を相対化しなければならない。ゆえにここで社会科学の成立可能性に大きな限界が付される。天皇制と社会科学は親の仇のような関係にあるわけです。

忠孝一如を肯定するためには儒教の根本的なテーマである、私はConfucian Dilemmaという名前をつけていますが「忠ならんとすれば

孝ならず、孝ならんとすれば忠ならず」という根本的なジレンマを解消してしまわなければならないのです。そんな解消ができるかという、それはまさに天皇制を創出することによって解決されている。つまり言葉が軽くなるということによって解決されている。言葉が重ければ異なる原理・原則が対立した場合に解決がつかないという状態を甘受しなければならない。

そうすると、言葉の出る場所という考え方がありますが、軽い言葉が出てくる場合に言葉がどういう場所から出てきているかということを見てみると、まずそれは理性から出てきていない、事実からも出てきていない、また、信仰からも出てきていない。それは状況から出てきている。ということは、状況に支配されているということは心情倫理的になっているということではないかと思うわけです。

そこで、次の右側の絵を見ていただきたいと思います。ここは中国とヨーロッパと日本を比べてありますが、中国というのは二元的にできていて下に家族の大きな相続集団があり、そこでは孝が第一原理である。上に官僚制があって、そこでは義が第一原理である。官僚が人民を支配するために法を与えるという構造です。ですから、人民が従うという孝と主体府が従う義とは本来関係がないので、場合によっては矛盾するわけです。こういう二元的なもので、この組織の二元性、多元性が中国人の厚みをつくっている。

例えば孔子の儒教の5大徳目の中の「夫婦」というのを見ると「夫婦は別なり」とか何とか書いてあって、夫婦は別なのです。どうしてかと言うと、配偶者はある相続から別な相続にやってくるので、配偶者の背後には別な親族集団の利害関係者というのがごちゃまんといいて、夫婦関係というのは政治的關係になってしまうわけです。わが国の場合にはそういう親族集団がありませんので「夫婦が別」などと言っているようではだめで、夫婦茶碗とかいろいろあのようなものがたくさんあるわけです。

次にヨーロッパの場合を見てみますと、きょうはヨーロッパの話

はあまりしませんが教会と王権の二元的なシステムになっています。教会というのは予言者というものが創出したもので、予言者の最後の存在がイエスですが、イエスが「教会を造りましょう」と言ったので教会ができました。そして教会が存在しなくなった時代にはその人々は知識人と呼ばれる形で現在も生息しているわけです。

教会はセクリッドなものですが、彼らは言語を使うことができる。この言語、権力と独立に動くという点が重要ですが、それはどのように保証されるかと言うと、聖書の中で見てみますと十戒というものがありますが、十戒というものの何番目か、こういうものがあります。「隣人を陥れようと法廷で偽証してはならない」偽証の禁止というのが十戒の中にあるのですが、このような規定を持っているユダヤ教、キリスト教というのは大変に言語について重要な意味合いを持ったと思います。

偽証というものを考えてみると、それは神が証人になっていて、法廷で正しいことを証言するのが神に対する義務でしょう。人間に対する義務ではない。偽証かどうかということを法廷で決定するわけではなくて神が決定するわけです。そうすると良心の問題になりますから、どういう権力をもってしても偽証をさせることができなくなるわけです。理屈の上から見て。ここで初めてある状況下では言語を正しく使うことができる。これはジャーナリズムとかいろいろな科学とかそういうものの基本だと思いますけれども、事実神が証人に立っているのだから、私がそれを裏切ることはできない。人間関係の問題ではないし政治の問題ではないのです。こういう領域がもたらされる。

わが国に伝わった仏教にも妄語戒というのがあります。妄語戒というのはうそをついてはいけないのです。しかし仏教の場合、成功しなかったのは、これが限定つきではないのです。日常生活の中でもうそをついてはいけない。そんなことは不可能です。そうしたら、どうしてもうそをつかなければいけない状況があったらどうするか。それは方便ということで許される。つまり絶対の規定ではないので

す。偽証というのは法廷でうそをついてはいけないのですから、法廷以外の場所でうそをついてもよいのです。つまり大部分のときにはうそをつける。ただし法廷では実験室とか真空状態とか、高温高圧下ではとか、そういうことですがけれども、うそをついてはいけない。これが真理ということを生み出すための社会的装置です。

ですから、その原則があれば教会と王権が分離し、権力と信仰が分離し、信仰の内部に言葉づかいが1つできる。そうしたら権力は批判できる。そうしたら政治学ができたり政治倫理とかそういうものを言論によって構成することができる。こういうことなのです。

日本の場合には先ほどの忠孝一如という、右側の上のほうに行きますが「一本、二本の何とか」という部分が孟子の中にあるんですけども、一本というのは一元論、二本というのは二元論だと思えばよいと思います。吉田松陰はこのようなことを言っています。「一本は天地の常理、皇国の大法にして、漢士聖人の至教なり」。つまり中国でも日本でも全世界で一元論というのが正しいのである。

いろいろ例が挙げてありますが「父子と君臣と、善く見ざれば二本になるなり」。よく見れば一本だと。しかし実際問題、君主と父親は違います。ではどうなるか。そうすると実際にはこうやって解決するわけです。「一旦は重き方の為に、軽き方を棄てて顧みざることもあれども、其の事終わる時は、又前の罪過を償うべき事、固よりなり」。状況によって現象的に見える二本のうち、片方を取ると、しかし、それは二元論に立っているのではなく、その状況が過ぎ去ったならば顧みられなかったような価値をもう一回取り上げて「悪かったな」というように反省する。これで自分の立場は一貫しているというように論証するのです。

どうなるかと言うと、「講孟割記」の中では「幕府を尊敬せよ」と書いてあります。勤皇佐幕なのです。しかし、これは二本なのか一本なのか。あるとき状況下においては軽きを棄てるわけです。そうすると勤皇佐幕の考え方のまま勤皇倒幕になります。つまり尊皇攘夷になります。状況がまた変わりますと尊皇開国になります。そし

て幕府は「悪かったな」ということで貴族にしたり、また処遇を考えればよい。

天皇を大事にしているわけですがけれども、天皇と国家とどちらが大事だということになると、国家ではないかと。そうすると天皇はただの機関だということで天皇機関説に移行し、立憲君主制になって明治国家になる。しかしまた次に行動派の青年将校が出てきて機関説を攻撃するとか、このようにして状況次第でどんどん移っていく。

ではここで保たれている一元性というのは何かと言うと、吉田松陰の言い方では志となっていますが、志というのがいったん定まっているのならば、どういう状況にあっても自ずから道が開けてきて、それが志士とか自己アイデンティティになると。この原理で明治維新は行なわれたわけです。「志士は溝壑に在ることを忘れず」。溝壑というのは溝や水たまりのようなことで、水と屍とかそういう「海ゆかば」の考え方の基がここにあるわけです。

つまり、志士というのは死を覚悟していなければならない。死を覚悟すると、それは空間・時間を超えた、おそらく戦前的な言い方だと悠久の大義というものが見えてきて、そこで自分と共同体が繋がっていくという一元論が完結するのだと思いますけれども、そういう心情倫理なのですけれども、これは大変に危険というかみみっちい考え方であって、つまり死がピリオドになる。ある人が死んでもそのあと残っていくものがある。その残っていくものに責任をまったく持たない考え方なのです。そういう点を抱えてしまったという点が天皇制の一番の問題点です。

こういう天皇制を構成することによって出発した日本というものは、ずいぶん大きなトラウマを抱えたと思います。まず、尊皇思想の忠孝一如は何で機能したかと申しますと、それは朝廷～幕府の二元的体制、幕藩体制を破壊する破壊力を持った一元論だからです。それは天皇の「大権」、プレロガティブに起因する近代化革命というのを実行できた。これはイラン革命とか、中国の毛沢東革命とか、そ

ういうものとよく似ているのだと思いますけれども、一元的な価値観によって社会革命を起こしますと、その結果で上がった国家が神聖化、宗教化してしまうわけです。それを否定する論理というのは個々人の側にはなくなってしまいます。そのために国家をだれがコントロールするかという問題が生まれてきます。どこの国でも皆同じ結末をたどりました。

忠孝一如原則というのは、しかし外国への脅威のリアクション、ナショナリズムなのですから、外国と同じ存在になることによって均衡するわけですから、一応、立憲君主制になります。立憲君主制になったけれども教会と王権の政教分離型ではないという形にならざるを得ないです。

しかし、実際にそういう神聖国家的立憲君主制の内部ではどうなるかと言うと、個人の帰属というのは例えば企業であり、例えば軍であり、例えば官僚であり、学校であり、いろいろな小集団にいるんですけれども、忠孝一如の原則で行動している以上、この業界がすべて国家のサブ集団として神聖化していくという自立的傾向を生みます。その結果、天皇が象徴化していくのですが、軍部が神聖性を帯びて国家の内部で異常に増殖した結果、戦前の国家が崩壊したという経緯についてはご承知だと思います。

3でそのことを振り返ってみますと、20世紀になってから日本が巻き込まれたのは総力戦の体制でした。そうすると、日本全体を皇土化、国防化していかないといけないですけれども、そのプロセスで日本社会の全体は業界の集積体「Σ業界」として再編されたと思います。これには大政翼賛会とか名前がついていましたけれども。これが実は天皇を頂点に頂く国体と呼ばれていたものです。

戦後どうなったかと言うと、天皇の権威はなくなったんだけれども、「Σ業界」という体制は前後にも受け継がれているのではないかと思います。もちろんいくつかの業界、例えば軍というものは解体されたのですけれども、他の業界はびんびんして生き残っている。広告業界などというのもあるわけですがけれども。

では、戦前から戦後への変換をなし遂げたのは何かと言うと、私流に言えばアメリカの大権、アメリカのプレロガティブというものがある、この変化というのは行われた。それは日本人の中の自制的な力ではなくて、そういう形であらざるを得ないわけです。それは忠孝一如の原則から言えば個人が天皇を批判して、それを乗り越える体制を生み出すということはできないわけですから、どうしてもそれを超越する体験というものが出来なければならぬ。

戦後、知識人というのはどういう役割をはたしているかと言うと、この業界の秩序を抜け出していないと思うわけです。革新というのは1つの業界でして、保守言論というのは1つの業界でして、それぞれかまびすしい議論をしているのだけれども、仲間受けを狙っているわりには実は本当に異なった業界に届く言葉をどこまで発するかということはどうでもよいわけです。経済学で言いますとマル経と近経、歴史学で言うとマルクス主義史学、これは皇国史観の焼直しですけれども、それに最近、自由主義史観というのがまた逆襲で出てきている。

政治学でいうと丸山政治学と近代政治学。これはなかなか無縁のような関係でどのようになっているのかよくわからないのですけれども。法学で言いますと我妻法律解釈学というものとヨーロッパ風の法哲学や憲法学というもの。人類学で言いますと機能主義人類学に対してドメスティックな民族学となって、この関係が非常にわかりにくい。社会学で言いますとアメリカ社会学に対して批判社会学というのが出る。社会学もマイナーの業界なのでどうでもよいですけれども。

このようにそれぞれの業界がさらにミニ業界によって組織されていて、この業界の中でそれに帰属し、どうやって生き延びていくかということも社会科学者のたいていの場合、まさに考えるというのは最近の言い方ですと「博士号がないとだめだよ」とか「デフリっきの論文が何本あるか」とか、これも皆業界用語でして、そうやって適応すれば適応するほど業界外にとどく言葉がなくなっていくと

いう現象があるわけです。別にデフリットペーパーを書かなければ業界外にとどく言葉ができるかと言うと、そういうことでもないですけれども（笑）。

そういう業界外では思潮が次々に交代していくということが起こりまして、マルクス主義が出てきて、実存主義が出てきて、構造主義が出てきて、ポストモダンが出てきて、最近ではカルスタと言うらしいのですが、何かそういうものが出てきたりいろいろしているわけです。そしてこの特徴というのは、まず過去に何があったかということに次々に忘れていくという素晴らしい能力を持っているわけですけれども、そういう広い意味でモダニストと呼んでおけば、それは現実に責任を持たなくてよい。そして私の見るところ、ますます軽くなっていっていると思います。

先ほどの繰り返しになりますが、言葉が軽いのは言葉の源泉が理性でも権力でも信念でもないからなのです。それにもかかわらず何かしゃべろうと思うと普通は失語症になります。自分の中に言葉が出てくる場所を見つけられなければ沈黙するなり黙るなり、それに耐えるしかないのです。しかし、世の中にはおしゃべりな人が大勢いる。それはしゃべっているとお金になるからだと思いますが、つまりそういう根拠を信じないで語り続けようとする、価値相対主義的に語るということになります。

それは専門に特化して業界の掟に従い、業界のパラダイムに従ってしゃべり続けるということなのですけれども、専門化というのは広い意味で実は価値を信じていないのです。業界に対する帰属意識を一時的に考えているというのは天皇制の構造で、そして、忠孝一如のなれの果てだと私は思います。

最後の4をあと十数分でお話しします。日本の社会科学はこれからどう立ち直ればよいのかという難しい問題ですが、ここでは価値相対主義といういろいろな現代的な意匠があるんですけれども、これを乗り越える方法があるのかというように問題を立てかえていきたいと思います。価値相対主義に対して単純なアンチテーゼは価値

絶対主義というものがあって、価値絶対主義に立てばよいのではないかということになるんですけども、ことはそんなに簡単ではないと。

まず、古典的な定理というか結論として価値相対主義と価値絶対主義がけんかをすると、価値絶対主義が勝つというのがあります。価値相対主義は実は思想の立場としてはなり立たないのだという有名な哲学の話があります。どういうことか。例えば私が民主主義者で、民主主義というのは言論の自由を認める価値相対主義です。そうするとヒトラーが出てきて「おれにも言論の自由を与える」というので与えるわけです。ヒトラーが言うには「世の中には民主主義者などという軟弱な存在がいてはならない。私は突撃隊に命じて民主主義者を片っ端から撃ち殺す」という言論をしているわけです。

それは言論だからいいだろうと私は認めている。次に私は襲撃されてしまって価値相対主義者1人残らず殺されてしまって価値絶対主義だけ残りましたという議論があって、価値相対主義というのは価値絶対主義の前で自分を主張できないという定理は昔から知られているのです。でもこれはカリカチュアであって、価値絶対主義そのものが崩壊していったあとで価値相対主義に流れ着いたという状況の中から抜け出せるアイデアにはなっていないわけです。実際問題として価値相対主義の全盛時代になっていると。

まず、作業化説というか考え方の提言ですけども、このアポリアを抜け出すために、まず絶対と相対という区別は相対的であると考えてみたらどうだろうか。ちょっと変……。わかりますか。つまり、世の中には相対的なものしかないというのが相対主義です。でも相対的なものの中にも、どちらかという大事なものと本当にどうでもよいものとあるわけだから、そこにまず注目する。相対主義というのは価値がないという意味ではないです。何らかの価値はあるわけです。

そこでいままで絶対と呼ばれていたものは相対の中で相対的に大

事なもののことだったのではないかと考えられる。相対的に大事なもののうち、一番大事なものを絶対と呼んでいたにすぎないのではないかと、これは右上に書いてある絶対の定義ですけども、相対の極大値を絶対と考えようと。考えるととりあえず相対的な価値の中で一番アクティブで効力があるものが他の価値を支配して整理することができるので、制度の形成力が生まれるのではないか。制度を作るためには皆が納得する価値基準がないとだめですけども、そんなのを理屈の上で探そうと思ってもなかなかだめなわけですから、異なる価値が会って討論して、その中で勝ち残りゲームでやっていくというやり方以外には考えられないというやり方です。

そこで例えば過去の例、例えばヨーロッパはどのように価値絶対主義に一時できたんだろうかと考えてみると、神の絶対化ということがあったからです。神の絶対化というのは必ず重りとして何かを相対化しているはずだと考えると、人間を相対化していると思う。神を絶対化するから神の言葉が絶対化され、契約が絶対化され、法が絶対化され、法の前で人間は相対化され、ゆえに権力者である人間から弱い人間も守られるという順番になっています。これが機能するためには人間を相対化する、神を絶対化するという場面が具体的に設定されていないとだめなのではないか。

結局、神などというのはどうやって考えられたかというように、これは古代ユダヤ教会とかいろいろな意味で考えてみると、ユダヤ人というのは全滅の危機というのをいつも考えていて、全滅しそうになると権力者も人民も神も含めて全部全滅してしまう。それを避けるためには神が共同体の外にいて絶対のもので、そして、何か超能力で救ってくれるという信仰の体系になるしかないのではなくて、たまたまなったんですけども、そういうことではないかなと。そういうときに必要とされた。

ひるがえって、日本になぜ絶対神がないかと考えてみると、日本が丸ごと全滅させられるような強大な敵が現れたという経験がないということではないかと思えます。そういう経験があればユダヤ人

と同じだったかもしれない。そのように考えて、そうすると1つ一神教圏と日本とを連続させていくようなあるロジックというか状況というものを考えてみるができます。

次は理性です。理性というのは何を相対化しているかと言うと感情ではないかと思えます。人間的なお腹がすいたとか、こちらのほうが得なのにとか、いろいろそういうことを無視して、それと独立に算数とか、計算とか、論理とか、そういうことを運用するという能力である。それが証明とか三段論法。経験に依存せず思考の論理のみによって結論を得るというフォーマットができるのです。

ヨーロッパでは神（ヘブライズム）と理性（ヘレニズム）との2つの混合によって彼らの社会秩序をつくったとすると、これの機能的相当物を日本の社会の中に発見して、ツールづけていくということができればよいわけです。別にその通り真似をしなくても大丈夫なのです。

神と理性というのはどのように機能したかと申しますと、神の前で人間の権力は相対的、理性の前で人間の権力は相対的。つまり権力を相対化できたのだと思うのです。これが神や理性の存在理由だと思いますが、大変逆説的なことに、そうすると神と理性は実体としてそこに存在するわけですから、神と理性がもし「権力があってよい」と言ったならば、絶対的な権力をここから構成できる。このように思います。

日本の場合はどうなっているかと言うと、神は相対的で、人間とバーゲンをしたりなどしているわけです。理性も感情と連携しているわけです。そうしますと言語も権力も理性も、絶対的な優位を占めるという瞬間がないので相対的だと。そうすると何が絶対化されているんだろうか。何かが絶対化されている。これは状況ではない。状況を絶対化するから、そうすると残りのものが相対化されるという論理が働いているのではないかと思うわけです。これを山本七平さんは空気と呼んでいます。

私のやり方は、日本がこういう歴史的な社会技術を持っていたと

いうことは伝統として否定できないわけだから、これをありありと見つめて、そしてリテールにわたって記述する。そのことによってある意味でそこから抜け出る社会科学の可能性というものが生まれてくる。これを暗黙知のままにしないで、ある意味で言語化していく。そうすると、その言語が状況を相対化しているという作用が働いてきます。これはその社会の健全化のために大変よいことである。

社会科学というのは、もし働きがあるとすればこういう作業から出発しないのではないかと思ったわけです。そのために使えるのが言語ゲームというアイデアです。これは哲学者のヴィトゲンシュタインという人が何かむにやむにやわからないことをメモの中で述べていて出版されていて、英米哲学で大変に影響のあるものなのですが、わけがわからないながらにここにはいろいろな思考の材料というものがたくさん詰まっています、社会科学に有用だと私は勝手に個人的に思っています、それでずっとそういうことをしているのです。

どういう点が有効かと言いますと、彼によれば人間のやることは全部言語ゲームだと。言語ゲームと言って言語が邪魔だったらゲームと考えて下さってけっこうです。実際問題人々の振る舞いの一致というものが社会の実体である。何かわかりやすい例がないでしょうか。学生に話すときには1万円札の例を出します。私が1万円札をひらひらさせるとお金だと皆思います。ところがこれはなぜお金でしょうか。「私はこれをお金だと思っているから」というのでは答えにならないです。私が思っているだけではお金にならない。実は私がこれをお金だと思えるのは、それを受け取ってモノを売ってくれる人、つまりこれをお金だと思っている別な人がいるからなのです。その別な人はなぜお金だと思えるかと言うと、また別の人がお金だと思っているからでして、この貨幣が流通する範囲で皆がこれをお金だと思っている。他の人がこれをお金だと思っていることが自分がお金だと思っている根拠になっています。

実はこれは根拠がないというのに等しいですね。その証拠にイン

フレなどになったりすると、ただの紙になったりなどするわけですが、そういう根拠のないところに、しかし現実の価値というのが存在している。お金を1つの例に出しましたが、他の例えば孝とか忠とか言語でも何でもよいですけれども、同じ形式を持っているわけです。ですから社会の価値というのを実証的に記述していくということは実は大変難しいことですが、ゲームとして記述していくというのが一番正直で正確なやり方だと思います。

そうすると、そのゲームの中にいる限りその価値を否定することはできない。日本にいる限り1万円札に火をつけて燃やしたら気遣いだと思われまふ。しかし、もしこのゲームが終わってしまったら次のゲームが始まっていますから、そのときには1万円札はただの紙切れになるわけです。どのようなゲームからもやがていつかは外に出ることができる。つまり、どのようなゲームも相対的です。

しかし人間であることをやめない限り、必ず何かのゲームの中に入っているでしょうし、その価値は否定できない。その意味で自分が属しているゲーム社会は絶対的です。こういう相対論と絶対論を両方持っているというのが言語ゲームというアイデアだと私は思ったのです。

そこでそれを使って社会学をいろいろやってみたのですが、そうすると西欧と19世紀の社会配置というものを1つのゲームとして記述できる。つまりローカルなものです。同時に日本人のやっている日本社会の来歴や系譜というものも、やはりローカルで歴史的なものです。これらとともに記述する1つのゲームの土台というものを与えることができれば、これは社会科学の普遍的な形式になっていって、西欧流の社会学を日本に適用するというやり方よりも妥当性があるのではないのでしょうか。そのように思うわけです。

次に4です。社会科学はそうのように自分の社会を記述し、他の社会を記述し、それを言語化し、そして人々に行動の基準を与えるものなのですけれども、二重の役割を持っていると思います。1つは科学である以上、法則科学でして、事実を予測するという役割があ

るわけですが、同時にこれは自然科学にない特徴ですが、けれども制度形成力というか、規範と言いますか、ある社会の人々が行動する原理・原則を提供するという側面もあるわけです。

経済学などはまさにそうでして、消費者として効用を最大に追求しなさいとか、企業は利潤を追求しなさいとか、そういうのは実は制度的な要請でそういう制度があるとそのように行動しないといけなという話なのですけれども、しかし体裁は法則科学の体裁をとったので、実は二重だと思うのです。

こういう社会科学というのはどのように現実社会の中で機能していくかと言うと、まず合意があって、ある制度でやりましょうというように所有権の制度とか、市場経済とか、民主主義とか、そういうものをつくるというルールを設定する。ルールを設定すると、そのルールの中で行動する主体ができる。例えば、サッカーのゲームが始まると、サッカーのプレイヤーが現れるように民主主義が表れる。民主主義のプレイヤーという意味での主体というものが表れてくる。主体は独立していますから、勝手に動き回る。勝手に動き回った結果、何かの法則性が出てくるわけで、それは予測できる。これが社会法則ですね。

この社会法則は、ある社会状態を実現しますと、これはよいだろうか、悪いだろうか。今度評価の問題が起こってくる。不満な人が多いとかと言うと、また先ほどの合意はなしにして「次の時代をおつくりいたしましょう」という、もう1つの合意が生じ、次の制度が構築されると。この連関運動をずっと続けて行くというのが社会科学の本来のあり方ではないか。つまり、実践的です。

ところが、わが国の社会科学は業界に与えられた別の名前なのです。業界に与えられた名前では、業界の内部で生き延びるための原論をつくるのが精一杯で、その業界から社会に「Σ業界」に向けて、制度形成力のある言語を発するという動機と能力がある。こういう問題が起こります。

日本にとっては業界を破壊して、社会科学と社会の往復運動。こ

これはよく責任というように呼ばれるのですけれども、経済学者は経済学者の、政治学者は政治学者の、人類学者は人類学者の、社会学者は社会学者の、それぞれの学問分野の社会に対する責任というもの原論の形でとっていくということが、この次の合意をつくり出すための出発点になるのではないか。

フロリダのリカウントの話をちょっと出してみます。フロリダのリカウントで何かばかばかしい投票の集計報道があって、日本人は「日本人なら、すぐ投票結果がピチッと出るのに」とか言って、さんざんばかにしたわけなのですけれども、私は非常に敬意を持って見ていました。というのは、彼らが談合したり「もう止めよう」と言ったり、絶対しなかったからです。どんなことでも、裁判と手続きの中で解決しようと思ったのです。憲法に忠実であろうとした。

敬意を持った1つの対象は、200年前に合衆国憲法やさまざまな規定をつくった為政者たちです。彼らはどんなに少ない確率であろうとも、起こるかもしれないことに関して、そのときに人々が信念を変えないで、良心的に行動できるように想像力を働かせて政府をつくったのです。その意志を体現して、裁判は裁判で解決しようとする。裁判というのは事後的な決着ではなくて、事前に法があって、ルールがあって、そのもとで考えるなら、これが正しいという考え方です。

つまり、ルールの中でやるということを最後までやり通そうと思って、もちろんそこに政治や駆け引きがあるのですけれども、頑張ったのです。それが社会科学が目指すべき精神の1つのやり方なんだろうと。わが国にも、そういう制度をつくるときに、こういうマインドというものがとても必要になってくる。

ですから、学問というのはとりあえず業界を無視して行くということが大事だと思うのですが、私のモットーは生きるように学問をする、あるいは学問をするように生きるということなのですが、どういことをやらないかと言うと、まず批判はしない。批判というのは言論の業界の側に立って、当の責任者である別な業界を攻撃し

て、自分は責任をとらないという、そういう態度。もっとまじな批判もあるのかもしれませんが。批判はここでそういう意味合いに使っておけば、批判よりも自分が責任をとれる場所で責任をとることのほうが大事である。

啓蒙はしない。啓蒙というのは、啓蒙される場所と啓蒙する主体というのが分かれていて、知識が流通して流れていく商売をしているわけですね。そうでなくて、結局自分の資質を高めていくという意味での言葉使いしかないのではないか。ファッションとか、意匠とか、流行というものがありますが、そういう効果ではなくて、自分の生きることそのものであるように知識や言葉を使うのでなかったら、何の意味もないと。こういうことをモットーにしてやっています。

Human Studies Forum (第9回)

「日本の社会科学はこれでいいのか？」

【ディスカッション】

スピーカー

東京工業大学大学院社会理工学研究科教授

橋爪 大三郎氏

司会

京都大学大学院人間・環境学研究科助教授

大澤 真幸氏

【大澤(司会)】どうもありがとうございました。実に盛りだくさんの内容を短時間にやっていただきました。橋爪さんがメディアに出るようになってから、もう何年かになりますけれども、私はその前から知っているのですが、普通皆さん、橋爪さんを半分ぐらいしか知らないという印象……。上野さん、船曳さんは昔からご存じかもしれないけれども、他の人は大抵有名人になってからなので、橋爪さんの半分ぐらいしか知らないのですが、私は橋爪さんの昔の部分から知っているのですが、最後の生きるように学問をするというのは実によくわかると思いますか、橋爪さんの人となりをよく表しているというような印象がしました。

いずれにしても、大変盛りだくさんの内容でしたが、大変クリアーに説明していただいたので、細かいところはちょっと難しいと思われたと思いますけれども、大体のところの主張はご理解いただけたのではないかと思います。これからいつものように討論に入っていきたいと思うのですが、どなたからでもけっこうですので、いかがでしょうか。

【篠原(京都大学総合人間学部教授)】私は芸術関係のことをやっています。どなたも質問されないで、ちょっと見当違いになるのを覚悟で、いくつか思ったことを話したいのですが、日本の思想史ということがかなり問題になっていたと思うのです。いろいろお聞きしたいことがあるのですが、1点だけに絞ると、例えば、私はどちらかと言うと、平安時代の思想家にすごく興味があって、中でも一番読んだのは坊さんの慈円ですけれども、慈円の考え方に、「愚管抄」によく出てくる言葉ですけれども「心得る」という言葉があるのです。これは要するに、学問の本質は心得ることにあるという、そういうことですが、道理を心得ると言うか、理解するということですね。

同じ慈円の言葉ですが、彼は6,000首ぐらい和歌をつくっているんですね。それで「豆和歌の歌詠み」などと言われていたぐらいで、比叡山の座主を3回も経験した人ですから「和歌なんかいう

つつを抜かして何ごとか」と批判されたぐらいなのです。その中で聖徳太子に捧げた歌のあとがきみたいところで、歌の本質というのは「心やることにある」と。そういった意味のことを言っているんですね。

何が言いたいかと言うと、例えば慈円さんの中で同じ言葉を書いているわけですよ。「愚管抄」という歴史哲学の本ですね。もう一方では和歌をたくさん歌っている。橋爪さんの言葉が軽いということについて、きょう論及された中で、いろいろな言葉があると思うのですね。恐らくは慈円の言葉使いで言うと、道理を心得るときの心得の言葉使いだったと思うのです。

これを西洋などと比較しようとする、心得る言葉使い、心やる言葉使い。西洋の場合だったら恐らく、きょうロゴスという言葉と理性という言葉を出されましたけれども、何と言うのでしょうか。心得るというのは恐らくアリストテレスの言葉で言うと、カタルシスコンのような言葉使いだと思うのです。まさにアリストテレスに起因する三段論法のことをチラッと出しておられましたけれども、これは理性の言葉ですよ。

西洋の見本を比較するときには、慈円の言葉で言うと、心やる言葉と心得る言葉の、ちょうど区別自体西洋とホモロジカルと言うか、相同的に語られるかなということをおもったのです。

ついでに言わせていただくと、本音と建前というのは恐らくヨーロッパで言うと、レトリカの問題で、やはりすごくいろいろな形でよく考えられてきたことではないかなという気もしましたので、ちょっとそういうことを感じたわけです。不明確な質問かも知れませんが、言い方を変えると「言葉が軽い」と言われたときの言葉があまりにも一元的にとらえられているような気がして……。問題は例えば心得る言葉をどうやって見つめていくか。そういう問題もむしろあるのではないかという気がするのです。

【大澤】いきなり最初の質問としては、わりに専門的な問題に関わるような形で質問していただいたのだけれども、要するにきょうの

議論の出発点である「言葉は軽い」という感覚は、ちょっと言い換えると、どんなことになるか、みたいな展開を前節にさせていただくと、お答えになるのではないかと思うのですが、どうですか。

【橋爪】和歌とかはすごく苦手なので、和歌が軽く詠まれているのかどうかというのは判断できないのですけれども、きょうは社会科学の話でしたんで、社会科学ということになると、日々実感するのは軽い言葉なのです。社会科学に関連する、例えば政治的な言語とか、日常言語とか、その中にもそういう軽さというのがあって、軽くなって、重みのある言葉はどこにあるのかなと思うと、私の知っている限りではあまりないのです。その重みと称されているものは多くの場合、心情倫理的なもので「俺の真心がわからんのか」と。そのような迫力というのはあるんですけれども、それは言葉自身の性能によっているのではないと思うのです。

仏教についてもいろいろ議論したことがないわけではないのですが、私には慈円のことはよく知りませんが、やはりパフォーマンスと言語を両方使うところが仏教の特徴で、あまりに和歌に傾倒するというのは……。ちょっと勉強させていただきます。

【篠原】ちょっとまたレトリックと言いましたけれども、西洋だったら、その区別がやはりディアレクティカルとレトリカというのがよく対応して書いてあるのですが。ですから、果たして日本にそういう区別があるのかなと、いまちょっと思いました。すみません。

【大澤】ありがとうございます。ちょっと1つ聞いていいですか。これからの議論の点になると思うのですけれども「言葉が軽い」というのは、恐らく直観的には皆さんだいたいわかる感覚があると思うのですけれども、何となく「言葉が軽い」というのは一種の比喩ですから、オペレーショナルにと言うと言い過ぎかもしれませんが、どういう現象が「言葉が軽い」現象になるのか。どういうところで「言葉が軽い」という、定義を与えるとすれば、どうなるかということをおもっただけ説明していただいて、議論の続きに行きたいと思っております。

【橋爪】先ほどの説明との関係で言えば、業界向けのものは軽いわけです。業界向けでない場合には別な次元で説明が生じますので、重くなければ責任が……。

【大澤】ありがとうございました。ではまた議論を。三島先生、何か。

【三島（大阪大学大学院人間科学研究科教授）】いろいろと教えていただいてありがとうございました。特に最後の、学問言語が社会的な新しい制度や現実をつくり出す力を主張すると。その辺りは基本的に賛成なのですが、多少破壊的なことを言わせていただければ、結論的に言えば、どうやら丸山真男の日本の思想の段階を一步も超えていないではないかと。

つまり、橋爪先生はいままで私はそうではないと思っていたのですが、基本的に「出羽守」であられまして「出羽守」は何かと言いますと「西洋では」「ヨーロッパでは」という「ではの守」なのですが、19世紀の社会配置で社会科学が出てきて、その現実の中であてはまる概念と言われましてけれども、その中でマルクスもあれば、19世紀の終わりになりますけれども、ウェーバーもあれば、デュルケムもあれば、ウェーバーと同じ近代の政治について、全然違う立場に立ったトーマスもあれば、いろいろな社会科学のパラダイムがあるわけで、それぞれお互いに自分たちの社会的現実を相手はとらえていないと思ったわけですから。そして時代が変わり、社会が変わるたびに新しい議論が出てきたわけです。

何かヨーロッパのものは全部ヨーロッパの現実があって、それを直輸入すると、合っていないと。これは丸山さんもよく言っていましたけれども、このような西と東のとらえ方の図式はわりあい西洋を一元化して見るというのがありますし、今度実際に日本という現実が存在するかは別にして、一応この社会もいろいろな制度が存在して、その中でどうしようかというときに、かなり危ないねじれ効果をもたらすのではないかと思うわけです。

その例として、例えば教会、王権という西洋のことを言われまし

たけれども、西洋のいつのことなのか。トーマスアキナスのときだったらある程度賛成できますけれども、西洋と言っても、イギリスからイタリア、スペイン。西欧と言うと、ポーランドを含めるかどうかわかりませんがいろいろありますし、プロテスタントの所ももちろんありますし、ユダヤ教の全滅危険の神だということも、古代ギリシャの中でもめっちゃめっちゃな戦争をしていましたし、ギリシャの歴史を読めば、全滅したギリシャ内部の諸民族もたくさんあるわけですが、依然としてギリシャは多神教であったし、どの時点のヨーロッパをどのように整理するのかが、わりあい明治以来の日本の山川出版世界史みたいな、ああいう感じでとらえられた西洋が少し一人歩きしているような感じがしたわけです。

その例は例えば、首長の交代、マルクス主義、実存主義、構造主義、ポストモダン、カルスタと。こう単純に行くかどうかわかりませんが、この図式だけで見れば、いわゆる「では」という西洋でも実際起きているわけですから、それがよいかどうかはまた別問題ですけれども、何となく違うという、その直感は私ももちろん共有しますが、何となく違うところを言語化するとき、かなり西と東という図式ではむしろズレのほうが多くなって、さまざまな、例えば近代ということをも一つとっても、近代化のさまざまなバイアスが相互に依拠し合っている。よくはやりの言葉で言えば、エンタングルメントモダリティと言うんですかね。もつれ合った近代と言いますか、そんな視覚も必要でしょうし、例えばΣ業界などでも、去年ですか、ドイツの鉄鋼産業が非常に危なくて、連邦議会で鉄鋼産業構造改革法案が出たのですが、その委員会で代議士に配られた法案のA4の紙の一番上にはドイツで恒例のファックス番号が書いてあって、事務局はそこを消し忘れたというわけで、業界がもろに議会に出ているというのは隠し方が下手だということでもどこでもあることです。

先ほどおっしゃられましたが、これは私の例ですけれども、例えば年功序列は大嫌いですけれども、西洋ではそれが無いというのはもちろんうそであって、西洋でも日本ほどではないけれども、やは

り自分の部下に年上がいれば、やりにくいとかという発言は、西洋人とつきあっているとしょっちゅう出てくる話ですので、せっかく築き上げた社会科学でもう少し言葉にしていきたいと思うわけです。

【大澤】いまの三島先生のご発言に……。ちょっとだけ第三者的に弁護しておく、与えられたテーマの問題もちょっとあると思うのですね。「日本の社会科学は」というように与えられていますので、やはりそういう部分も多少あったと思います。ではいまのを念頭に置いて、関連の質問とか、あるいは三島先生自身……。

【大塚（都立大学人文学部助教授）】いま三島さんのおっしゃったことを私もお話を伺って考えていまして、こういう形で別な質問のしかたをさせていただきます。社会学者としての橋爪先生がきょう比較をやったわけですね。比較という形で理論をしましたね。日本というユニットと西洋というユニットの比較の単位として妥当なものであろうかという質問です。

もう1つは、これまた三島先生の話と絡んできますけれども、この比較をしたのは恐らく2つのレベルで違う比較をしていると思うのです。日本の現実、西洋の現実の問題と、日本の思想と西洋の思想という形の比較。西洋の現実という形になっているところが、たしかにここで言う聖・俗構造というのはいわゆる中世的な話なのです。

ところが、日本のほうのお話になってくると、松陰以降と言いましようか、その後の近代とかは別として、幕末以降の思想とか、もしくはもしくはその社会におけるあり方。例えば、この3つ書いた図ですね。真ん中の中世ヨーロッパというのはよくこういう形で比較されているわけなのですけれども、右側に書いた日本というのは、業界というのはいつ頃からこういう形になったか。これは幕藩体制から、いや平安朝からあったというお話なのかどうか。

つまり、ここで比較する単位としての日本というものを、どういう時代設定の中に置いているのか。これは恐らく三島先生が質問し

たことともちょっと絡んでくると思うのです。

3番目は私が一番聞きたかったことでして、結局きょうおっしゃりたいことは、そしてこれから目指そうとすることが西洋の19世紀の社会配置の中で生まれた社会科学というものと、現代日本と言いましょうか、もしくは近代日本の現実というものとすり合わせの中で、われわれは新しい社会科学の言葉を使っていかなければならない。それは1の3のところに書かれている、上に書かれている2つの立場を乗り越えるような形。全くそうだと思うのですけれども、その場合にわれわれは何語でだれに向かって語るのか。

つまり、日本語で日本人に向かって他の社会科学以外の業界とか、そういう人たちにも語るのか。そういう形で考えるのか。それとも、もっと国際的なという形の社会科学とか、思想とか、この場合単にアメリカ、ヨーロッパだけでありませんし、そういう人たちに向かって語るのか。語る場合に何語を使うのが問題なのか。つまり、そういう感じの普遍性ということを行った場合には、とりわけ言語派ということで考える場合には、何語で、オーディエンスはだれか。それが持っている普遍性、特殊性ということも同時に考えなければいけない。当然、その場合には翻訳の問題等々も絡んできます。その辺を伺いたい。これが3番目のことです。

【大澤】ではいまのは三島先生の質問と、少なくとも最初の2つはオーバーラップしていると思うのです。つまり、日本とか西洋という単位の設定はどういう根拠に基づくのか。日本の業界化というのは大体いつ頃からの時代設定で考えていらっしゃるのか。まず、この2つを最初に答えていただいて、その後……。

【橋爪】言葉を使うときは概念を使わなければいけない。概念というのは区別ですから、ある範囲のものを適当にまとめて、違いを無視して同一性を設定して言葉を使います。言葉を使った途端に、それは現実とずれているという批判はしようと思えば、いくらでもできるのですけれども、きょう話したことは、いわばスケッチみたいなことです。このときの大つかみの概念の使い方としては、その概

念を使ってどういうコンセプトを出そうかとすることが目的なので、ご批判はご批判でよくわかるのですけれども、私がやりたかったことはちょっと違うなというように思います。

次に比較の話が出てきましたが、私はここで社会の比較をしたのではないのです。あくまでも現場は日本なのですね。日本の社会科学なんですよ。そのときに日本語の中にある言葉は使う。中国語で使われていた言葉や概念を日本人はそれを持ってきて使った。ヨーロッパにある言葉はその脈絡をどこまで尊重したかは別として、使って、3つの言語が、概念系列がここで使われている。そういう現場がここにあるという話なのですから。

日本語かどうかは別として、日本の社会に対する社会科学の現場がここにあるということがまず出発点で、そのときに、例えば権力とか、理性とか、何とかという言葉があります。単純な言葉ですけれども、いろいろな来歴があると。その来歴を逆に投射して、どういう文脈の中から出てきている言葉なのかということを最低限見なければ、その言葉を使うのに差し支えが生じるでしょう。そうすると「なぜ知識が権力を批判できる」という文脈で批判的知識人とかいう形で、社会科学者の役割が西洋世界でイメージされるのかと言えば、こういう文脈があったのではないか。これは中世なのか、近代なのか、古代なのか、わからない絵だったかもしれませんが、これは言葉が飛んで来た方向にその原点のイメージを書いたものですから、いわゆる比較社会学や歴史学のことではないのです。

中国に関しても同じで、科挙が成立したのはもちろん宋代だし、科挙制度そのものも何回も変わっているし、官僚と言っても宦官もあるし、いろいろなことを言えばきりがありません。ただし、基本的に抑えておかなければいけない、日本社会にはない多元性というものはどういうところに孕まれているかと言えば、それは民衆の間にある血縁的な関係と、国家機構の中での集権的な関係とが分離されていて、言葉使いや態度が全部そこで違うんだと。それを同じだ

というようにして使っている日本人がいる以上、それを逆に差し戻して、違うんだということを踏まえなかったら、忠孝一如という言葉使いの政治的効果というものを分析できない。それを必要な限りでここへ持ってきたのです。そのようにある作業に必要な限りで逆投射しているわけですね。

ですから、それを実証科学的な、いわゆる業界とあれしませんが、専門家としてのやり方で言えば、批判をされるということは十分承知だし、私も不勉強であると思うし、勉強はしていきたいのですけれども、勉強していると、一生は終わってしまうので、終わる前にやりたいことはある正確さでやらなければいけない。そういう感じで考えています。

【大澤】自然と3番目の答えも何うようなことがあったので、ちょっと別の形で、やった後また……。では畠さん、お願いします。

【畠（ジャーナリスト）】先ほどの話を聞いていて、私はあまりよくわからないのです。私はジャーナリズムだから、ジャーナリズムというのは現場へ行って、現場から見ていて、それなりの社会の分析をするわけですから、きょうここに書いてある「日本の社会科学はこれでいいのか？」というのは、いまの日本の社会に対していまの学問が何かきちんと分析してくれていないのではないかと。はっきり言うと、私たちにはそういういらだちがあるわけです。

例えば、先ほどおっしゃられた丸山政治学だとか、ある時代のスパンをとって、丸山政治学で見ると、なるほど日本はこういうものなんだなというのがわかったのではないかと。例えば、経済学の宮崎義一さんが、中小企業構造論みたいなのを書くと、それはそれなりに「ああ、そうか。あの時代はそういう時代だったのか」というようなことがわかったと。つまり、ある種社会が分析できたわけですね。山根さんが「縦社会の構造」とか、先ほどの山本七平の「空気の話」もそうだろうと思うのだけれども、われわれは戦後そういう本をいくつか読みながら、そういう実感を持っているわけですね。

けれどもいまの時代というのは、例えば政治で無党派層などと言われて、無党派層というのはいったいどんな存在なのかということ、では政治学者はきちんと説明してくれているかと言うと「彼らの投票行動はこうですよ」とか、いろいろなことを言っているけれども、いったい価値観がどうなのかとか、彼らの成り立ち、あるいは社会学的な背景ということもよくわからないわけですね。

例えば、いったい日本はいま裕福なのか、裕福ではいいのかと。つまり、日本は金融危機でこれから日本は世界大恐慌に入るかもしれないと言っているけれども、一方でゴールデンウィークに海外切符を取ろうと思っても取れないという状況もある。こういう社会状況をどう分析したらよいのかというのが、やはり学者からも、あるいはジャーナリズムを含めてかもしれないけれども、あまりよく分析されていなくて、皆納得いかないわけですね。

例えば、グローバリゼーションなどと言うけれども、これがいったいどういう意味を持っているのかとか、われわれのライフスタイルをどう変えてくるのかとか、つまりいまわれわれが社会科学に対してあまり重要視しなくなってきたと言うか、あまり重きを置かなくなってきたというのは、いまわれわれが生きている現代社会をスパッとわかりやすく、ある意味で言うと目から鱗が落ちるように「なるほど、そうなのか」という分析をきちんとしてもらっていないのではないかなという感じがあるのですね。

それは方法論の問題なのか、もうちょっと先ほどおっしゃられた具体的事実をきちっと語っていないためなのか、その辺はよくわからない。例えば、生理学で言うと、計量分析などを使って、ある種の分析をするのだけれども、ある一部分ではなるほどだと納得はするけれども、ではそれによって無党派層の思想や行動などが全部分析できるかと言うと、そうでもないわけですね。

そういう意味で言うと、ここで言う「日本の社会科学はこれでいいのか？」というのは、学問論とか方法論と言うよりも、やはり「いまの日本の社会をもうちょっときちんとわかりやすく分析して

下さいよ」というのが、何か一般の社会科学に対する要請なのではないのかなと。そこに答えていないことなのではないか。それを答えるときに学問論とか、方法論とか、そういうことだけ説明されても、もうちょっと何かわかりにくいなのというのが、私の実感ですね。

【大澤】先生、何かおっしゃることがあれば……。

【橋爪】きょうそういう話をしてもよかったのですけれども、それをやめて、方法論にしたのです。私が言いたいことは気持ちは全く同じなのです。なぜか。それは社会学者が努力をしていないせいなのか。社会学者は主観的には努力をしているのです。努力をして一生懸命勉強すればするほど、いまおっしゃったような発言力がなくなっていくという構造があるのです。

【嵩】なぜ勉強すればするほど、なってしまうのですか。

【橋爪】それは普通専門化とか、細分化とか言われていますが、それだけではないと。つまり、ものを分析したりするには概念装置を使わないとだめ。眼鏡をかけるのです。方法を使わないとだめ。つまり、ノコギリやトンカチや何かを持って作業できるというような体制をつくるのです。作業できることしかできなくなるのです。眼鏡をかけたら、見えるようにかけるのですけれども、見えなくなる。

問題は何が見えなくなって、何ができなくなったかということをして学問をしている人間が十分に意識していない場合に、いまおっしゃったような状態が起きるということをお願いしたい。それにはそれなりの日本の社会科学が生まれた来歴というものがあると。社会学者自身が来歴について無知であると。ですから、そのディシプリンが構成された理由や、この方法や概念が通用しているけれども、業界の中で通用しているからと言って、さっさと自分がそれを採用してよいのだろうか。それはやむを得ないのですけれども。しかしあるタイプの人たちはそれをつけたり、はずしたりできるような状態にしておかなければいけない。つまり、非常に抽象的にそういうことを申し上げたのです。ですから、具体的に言うのはいまおっ

しゃったことなのです。

【大澤】 嵐さんの不満もよくわかりますが、橋爪さん1人を攻めても、ちょっとお気の毒な気もしますが。この場ではしかたありません。これからこれ自体が社会科学の分析であると同時に、いろいろ先ほどから批判も出ていますが、日本社会論的な部分もありますね。日本社会がどういう仕組みになっているのか。これがいったいいつのどの日本のことを言っているのかという疑問が先ほどから出ているわけですが、これ自体が1つの日本社会が現在どういう問題かということの社会科学的な答えを出そうという努力の一部にもなっている。そのようにご理解できるのではないかと思います。

【八幡（八幡事務所代表）】 先生の「天皇の戦争責任」という本を非常におもしろく拝見させていただいたのですが、いまの天皇制をめぐる風景というのはずい分変わって行って、首相公選論というのが、特に天皇制をうんぬんするような形でかなり議論をされている。また、この間からのえひめ丸の事件とか、あるいは新大久保の事件とか、ああいうところで実は皇室が全然出てこない。影がものすごく薄くなっていつている。ずい分と、この天皇制をめぐる風景が変わってきたと思うのですが、そういう中で例えば先生がああいう本を書かれてかなり思い切った発言を、特に国立大学教授という……。明らかに左の人はいろいろなことを言っていましたけれども、国立大学教授のお立場でも書かれていて、例えば、どこからかいろいろ言ってくるとかというのがなかったかというのは実は非常に興味があるし、また、そういう中で天皇の戦争責任みたいな話がタブーでなくなってくると、これまでやはりあの辺りがいろいろな意味で日本の社会科学のタブーの根っこをつくっていたような気もするのですが、何か変わってくるのか。その辺はどうなんでしょうか。

【大澤】 天皇の話は若干でてきたんですが、その辺りはちょっとどうですか。

【橋爪】 右翼の脅しとかいうのはなかったです。私はないと予測していました。右翼から感謝されてもよいと（笑）。脅されるいわれは

ないです。その代わり、戦争に行った方から3通手紙が来て「天皇の名前で好きくない戦争に行ってひどい目に遭った。天皇に戦争の責任があるのは当たり前なのであって、お前のような戦争のことを知らない人間が出てきて、こういう軽い言葉を使って大変迷惑している」というお叱りの手紙がありましたが、その方々はその手紙を出す権利があると思いますので、私はありがたく保存しています。

【大澤】 神谷さん。

【神谷（防衛大学校助教授）】 大変難しいお話で、私も分野から言えば、国際政治ですから一応社会科学になるのですが、あまりよくわかったとは言い難いので、質問と言うか、感想と言うか、わからないことを申し上げます。

まず最初に、テーマは電通総研が設定されたのかもかもしれませんけれども、そもそも社会科学と称さなければいけない理由が自分ですとよくわからないのです。科学でなければいけないというのは、きわめて西洋的発想でして、そこのところはどうも先生は最初から受け入れて話されたようなのが若干不思議でした。これはやはり社会学というものがそういう分野なのかなという気がしました。

というのは、社会科学と称するのは実は非常に分野が広いので、例えば「日本の理工学はこれでいいのか」というのとほとんど同じぐらい、あるいはもっと広いと思いますから、括り方としてはちょっとむちゃなんだと思うのですね。ですから、ここで言われている社会科学というのは、私の普通社会科学というように意識している国際政治の分野、あるいは政治の分野における科学的と称されるものからだいぶ違うなど。

大学時代、20年ぐらい前ですけれども、やはり社会学の授業、あるいは仲間の学生の話などを聞いていたときに、この通りの内容でなくて、雰囲気として、たしかこういう話がいろいろあったなというような、それを思い出して聞いたわけです。

以上が最初の感想ですが、私がよくわかりませんでしたのは全体として、いろいろ新しいことを学んでおもしろかったのですが、天

皇制及びその前段階と言うのでしょうか、忠孝一如で、日本の社会論がほとんど片づいてしまうという構成になっているわけですが、そういうものなのかなというのが、私の非常に素朴な疑問です。

もし、失礼に聞こえたら、そういうつもりではないので最初に謝っておいて、遠慮ないことを申しますと、国際政治学などで少数キーワードで非常にわかりやすくシンプルにバサッと切っているものというのは大抵怪しいというのが、私の職業上の経験から得ている信念のようなものなのです。

これは最初から最後までほとんど天皇と忠孝一如ですべてが切れてしまうわけで、何だか私の直感からすると、こういうのは怪しいのですけれども、怪しくないでしょうか（笑）。ものすごく露骨と言うか、プラントに聞いていますので失礼はお許し下さい。それ以上、ちょっとよくわからないものですから。

そうだとすると、天皇制というのが喪失されなかったら、ちゃんとした社会科学になっていたという話になるのか。つまり江戸時代以前から引き続けているものというのが現在の状況に与えている影響については、私は全然わからないのですが、どう判断されるのかというところもいまひとつよくわからないところでした。

三島先生がおっしゃった、どの時期のお話が問題になっているかというのは、私も実は似たようなことを考えていたのですが、例えば戦後知識人とおっしゃったときも、革新業界と保守原論業界の並立というようなことがちゃんと形をとって言えるようになるのは、少なくとも、政治、あるいは国際政治といった分野においてはたぶん1960年代も終わりになってからのことなので、それ以前はこんな言い方だと、革新業界しかほとんどないわけです。

ですから、戦後という図式も実は私にはよくわからない。ちゃんと読んでいないのですけれども、加藤先生のを読んだときもそういう疑問が常にあったのですが、戦争が終わって五十何年経つわけですが、ほとんど60年近く経つわけですが、これをまたひとまと

めに括れるのかどうかですね。

もう一回戻りますと、一番根本的にわかりませんのは、現在の日本の社会科学と言うか、あるいは社会的なものの研究、勉強、説明がこのままでよいとは、全然思っていないわけですが、その根源をここまで天皇制に求められるか。

最後にもう一回だけ、非常に恐れを知らず、凶々しいことを言いますと、どうも日本の思想界では天皇制の過大評価というのがあるのではないかなという気がしています。保守、革新を問わず、あるいは科学的であるとそうでないのと問わず、最近例えば若手の国家主義的な知識人と称されるような櫻田淳とか、ああいう私もよく知っているような人たちも、やたら天皇制というものを重視する発言を繰り返しているのですけれども、いくら議論しても、こちらはピンとこないという現状があるのですけれども、その辺はいかがお考えかということで、非常にまとまりないのですが。

【橋爪】いろいろ納得できる部分の指摘もありましたが、一番肝心な質問ですね。単純なものは怪しいと。これでよろしいのかという点に関して私の考えを言えば、私は理論屋なんです。理論屋というのは「こう考えると、いままで以上によくわかる」ということを提案するのが仕事なのです。そのときには簡単なものを提案するのです。簡単なものでたくさんの方がわかれば、生産性が高いので、そのように提案するのです。

ですから、怪しくてけっこうなのです。怪しければ、少なくとも興味を持っていただいたということなので、例えば、こういう点が怪しいというご指摘があったり何かすると、それは反省になりますね。そうしたら、理論は複雑にするなり、別な仮説を出して行けばよろしいので、それは往復運動です。ですから、狙いが達成されたということだと思えるのですけれども。

【大澤】天皇制のことはどうですか。

【橋爪】天皇制というのが決定的な役割を果たしたのは……。ある時期、例えば明治維新のときに決定的な役割を果たしたのはその通

りだと思えるのですけれども、その後、世俗化して忘れられてしまうわけです。しかし、その慣行が例えば業界と言いましたが、業界が社会的機能の中で制度的制約を外から被らないで、自己運動をしているという形で慣性力としてずっと残っていく。それは戦前にもあったけれども、戦後まで、あるいは現在まで続いているのではないかという、そういうのを天皇制の効果と考えることができるのではないか。このサゼッション。

【大澤】ちょっとその前に、天皇制というのは私のこの報告での理解だと、もちろん実際の天皇制のことも言っているわけですが、恐らく問題になっているのはそれに一番体现性のある、ある行動様式なのですね。ですから、そのように理解したほうがよろしいと思います。

この天皇制というのをこういう意味で使うのがよいかどうかは別として、先ほど言ったように狭義の制度としての天皇制ということだけではなくて、そこにそれを最終的に撤回したような、ある種の行動様式のパターンをそのように言っていると、ご理解いただいたほうがよろしいのではないかなと思いました。これは私の理解です。

【坂東（内閣府男女共同参画局長）】私は短く。私は橋爪さんとかなり昔、10年以上前にE K Vで一緒して、日本の家族とか、専業主婦の問題について話をしたときに初めてお目にかかって、そのときの印象では、私はかなり湿り気多く、いろいろな思いを込めて日本の女性の生き方とか、家族の変遷したことに対して、橋爪さんはあまりそういう湿り気なしに実にドライに割り切っている感じが記憶があるのです。いままた、先ほどから話を聞いていまして、ご自分のことを理論屋だと定義されたので「ああ、なるほど」と、大変わかったような気持ちになっています。

いま本当に忠孝一如にしても、従来儒学にしても、それが朱子学だろうが、陽明学だろうが、いろいろあるわけですけれども、皆唐の言葉なのですね。大和言葉ではない。大和言葉というのはもっと湿り気があって、人の心を種として、あまり理論では割り切れない

のではないかと思うのですね。

それをさらにちょっと敷衍しますと、いま日本がどうしてこんなに閉塞状況になってしまったんだろうかと。Σの業界のそれぞれの業界が皆閉塞状況にあるのは、その業界の中で皆さんが全部大和言葉、人の心を種として、率直に「こうあるべきではないの」「こっこのほうが正しいんじゃないの」「このほうがおもしろいのに」とか「こちらのほうがずっと皆が生き生きとするのに」とかという、大和言葉を忘れて、唐の言葉で「かくあるべし」とか「理論的に言えば」とか言って、精緻に詰めすぎていることによって、その中でしか通用しない。その中でさえ、状況を開拓できなくなって、そのΣの業界の参画がどんどん縮まっているということなのではないかなと。

わが官僚業界の閉塞感と照らし合わせて、皆本当に大体確証ありかどうかなどと、1時間か2時間くらいけんかするのは皆得意になって精緻な理論を戦わせているのですけれども、きっと外から見ると、とてもつまらないことを言っているというような世界に、それぞれの業界が皆がそうなっていらっしゃるのではないかなというような感じを持ちました。

【橋爪】私の感じはちょっと逆で、唐言葉か、外の言葉か知らないが、それをきちんと使ったら、それはそれでまたよい効果があると思うのですけれども、そうなってはいないのではないかという直感が逆にあります。

【塩見（日本音楽財団理事長）】私はきょう伺っていて、本当に何もわからなかったんですね。どうしてかなと思って……。私はいま音楽財団となっていますが、同時通訳が私の出発点で、きょうの話を同時通訳しろと言われてたら、それはお手上げで（笑）、結局同時通訳はできないということは私にはわかっていないということなのですね。いつも「日本語というのは非常に曖昧ですから」というようなことを言われるのですけれども、私は日本語が曖昧なのではなくて、日本人の思考形態が曖昧なんだと思うんですね。ですから、日本語

を悪者にしてはいけないと思うのです。

私たち同時通訳で、どうして日本語で話したことが通じないのかと言うと、常に武士の社会まで私たち通訳はいつも戻っていたのですけれども、日本の中で結局お互いにお互いの足を踏んではいけないということで「お説ごもつともなれば、当方にも当方の事情があり」というようなことをずっと言っていたら、だんだん日本語が何となくだれも傷つけないような形で話して、私は大和言葉でも何でも、どちらでもよいのですけれども、何かその辺り……。

私はきょうは全く業界の中に全然異質な者が1人入ってきたのではなかったかと思って、全く同時通訳のできない状況ということは、例えば日本を理解してもらおうと思うと、いまの話は外人にははっきり言って全くわかりません。天皇制とか、何とかという話ではなくて、どうなんでしょう、私だけが浮いていたんだろうかと。

【篠原】外人さんにはわかりやすいと思いますよ。私が言うことではないですけれども。

【大澤】塩見先生のおっしゃることはわかります。わからなかったということなのでしょうけれども、これは少なくとも……。正しい、間違っているかは別ですよ。三島先生が先ほどおっしゃったようにいろいろ異論のある方はたくさんいると思うのですが、恐らく日本の社会学者の言ったものとしては、非常に明解なほうです。恐らく過度なくらい明解なのです。ですから、どちらかと言うと、文句を言われている。

ただ、これはたぶん慣れというものがあります。私は橋爪さんとは十数年のつきあいですから、彼の用語法にもよく慣れているし、それだけではなくて、職業的な慣れもありますし、いま聞いてすぐわかるというのはちょっと難しかった部分もあるのかなと。いま何人かの方もよくわからなかったという議論もありましたので、そうかもしれない。

ただ、それは日本人だからわかりにくいのではなくて、恐らくそれとは別の理由でわからなかったと思います。これは恐らく英語に

しやすい文章ですね。コンセプチュアルにできている。

【塩見】そうですか。私はわからないと思うのです。少なくとも私の知っている外人にはわからないと思います。ですから、それがまた業界なのかな。ですから、業界同士で話していたらわかるけれども、外人の社会学で日本のことを知っている方しか、大体国際会議には出て来ないのですよ。日本人よりも日本のことをよく知っていて、日本人よりも、系統立てて日本のことを理解している。というのは系統を立てないと、外人はわからないから。ですから、国際会議にいらっしゃる外人と話されたら、専門家の仲間同士は非常によくわかると思うのです。

けれども、いま日本を理解してもらおうと思って、普通の日本人のことをわかってもらおうと思って外人と話すと、わからないと思うのですよ。

【大澤】それは見解の分かれるところですね。私はこれは非常にわかると思います。いまそんなことで水掛け論をしても（笑）。これは1つの感想としては重要だと思うのです。日本人でもわからなかった人もいるということは今後参考にはなると思います。その解釈はいろいろあるかと思いますが。

【上野（東京大学大学院人文社会系研究科教授）】私も社会学者なのですが、誤解のないようにお願いしたいのは橋爪さんはきわめて社会学の特殊ケースでして（笑）、かなりそれも極端なほど特殊ケースで、私も特殊ケースなのですが、私は特殊ケースだということを自覚している特殊ケースでして、橋爪さんのお考えが社会学者の代表だというようにはお考えにならないでいただきたいと思うのです（笑）。

社会学が社会科学でなければならないのかという、先ほどのご発言は全く私も同感してしまっていて、それをとりわけ国際政治の方がおっしゃるというのはもつともで、私はもともと政治学はサイエンスであるはずがないと昔から思っていましたから、それはそれでよろしいのですけれども、久しぶりに橋爪節というものを聞かせていた

だきまして「いや、この方は変わっていらっしやらないな」と、しみじみと考えにふけたところでは。

変わっていらっしやらなさの1つは、理論の高度の抽象性と、にも関わらず結論のあまりの実感性と直感性と言うか、その間を埋める回路が見つからないという、そこでちょっとご質問があるのですけれども、1つは議論の具体的な内容に関して言うと、現状認識、現実認識から言うと、三島さん、その他がおっしゃったことを私も感じていまして、日本社会はΣの業界だとおっしゃいますが、学問の業界が業界単位で、たこ壺化しているなどというのはどこに行っても同じようなことでして、日本だけのことではあるまい。

日本の社会科学の来歴が幕末にあるなどと言われても「そんなものを伝統とあなたに呼ばれても、私はそんなものを伝統なんてとても思えない。それを伝統と呼ぶときに、呼んだ途端に「あなたは理論を利用して伝統をつくり上げていることになる」というようなこととか、いろいろなことを思うのです。

例えば、戦後知識人の話をしていられっしやったかと思えば、いつの間にかそれが歴史的な時間を幕末まで遡行していたりとか、戦後の中でもいくつもの変化があるはずのものが大変1枚岩化しているということとか、すでにいろいろな方がご指摘ですから、同じことは繰り返しません、主として申し上げたいことは2つです。

1つは学問観がやはり橋爪さんとずい分違うなと思ったのですが、ここで出ているところで、1つは社会のより普遍的な記述を目指すこと。これは恐らく社会科学の科学であることの目的だというように考えていらっしやるんだと思いますが、より普遍的というのは、より絶対的と同じくらい、きわめて論理矛盾的な言い方ですね。普遍というものは普遍であって、絶対的な普遍ですから、普遍により普遍などというのはいり得ないわけです。

そこでより普遍とおっしゃるときにはやはり学問というものにある種の真理値というものがあって、よりそれが普遍に向かう方向に動くというような学問観というのをもちだす。そういう意味では

きわめて19世紀的な学問観というものをもちだすという気がした。

私は比較史とか、最近比較ということは最近自分自身は大変意識していますが、比較で比較の対象になるものはあるローカルとあるローカルで、例えばそのローカルと言うときに、西欧ローカルと日本ローカルというような言葉をお使いになりましたが、西欧ローカルという言葉をお使いになった途端に、私はこの方は比較ということをまじめに考えていらっしやらないと思うしかないのでね。

つまり、西欧ローカルなどというものがそんな大ざっぱなローカルとして存在するわけがなかろうと。そうすると、やはりローカルとローカルというものをそれぞれのローカルとして、つき合わせていくという作業しかないので、1つの相対と1つの相対の突き合わせですから、それを総合した上でより普遍ということにはならない。そういう意味の普遍的な学問観というものは19世紀的なものだというように感じています。

それともう1つは、例えば最後のほうに法則科学と言い方が出てきていまして、科学は法則科学であるというようにお感じのようですけれども、これも未来予測だということをおっしゃったのですが、レジメには「事実」と書いてあって、口頭では「予測」とおっしゃったのです。私は現在社会学に可能なのは事実の記述が、せいぜい良心的な記述ができることの上限だと思っていまして、予測というのは法則に基づく予測ということなのでしょうが、ヘッジファンドでさえ、未来予測ができない今日に、法則による予測をおっしゃること自体が科学の目的だとするならば、それもまたきわめて19世紀的だ。そのような学問観をすでに放棄したところに私たちの現在があるのではないかというのが私の学問観です。

そうしますと、最後のほうに1行実践的な指針と言うか、生きるように学問をするという、これもそれまでの抽象度の高い概念語に比べれば、突然に大変に実感的な言葉がここに出てきている。「人生」とかいう言葉が出てきているわけですが、としますと、このような理論の抽象性と結論の直感性、実感性というものを埋める、例

えば、具体的に言いますと、橋爪さんもまた社会学の教育現場というところにいらっしゃるわけですが、橋爪さんが東京工業大学というところでやっていらっしゃる社会学教育の実践と言うか、この分野を担う研究者たちの養成にこのような立場に立って、いったいどのような方法を採用していらっしゃるのか、そこの一端をお聞きしたいと思います。

【大澤】ずい分盛りだくさんだったのですけれども、ちょっと長いわりにどれがどれかわからなくなってきましたのですけれども、でも、いくつかお答えしたい部分をピックアップしながらお答えになったらいかがですか。

【橋爪】ご質問は2点あって、たくさんあったのですけれども、ローカルということはもうちょっとまじめに考えないといけない問題ではないかということと、東工大でどうやってこんな抽象度の高いやり方で研究者を育てているのか、その2点にお答えしたいと思います。

大変興味深く聞きましたが、一口で言うと、相対主義でなぜ悪いと。確信犯としての発言になっていると思うのですね。ですから、これは大変よい接点ができたとような感じですね。私が言ったのはその先で、私は19世紀的でも結構ですが、20世紀が革新的相対主義だとすると、そこで息詰まった先がまだあるだろうと。その方向を私はいま一生懸命見ているところであるとお話したつもりだったので。これはたぶん場外乱闘の世界で……（笑）。

それから東工大では私はいまの点と関係があるのかわかりませんが、研究者を育てるということはしていませんで、実践的な社会人の教育を念頭に置きます。心ならずも研究志望の方が来てしまうという場合があるのですが、その方は自己努力でやっていただいています（笑）。

【大澤】船曳さん、ちょっと先に。時間がないのですけれども、船曳さん、お願いします。

【船曳（東京大学大学院総合文化研究科教授）】いつも橋爪さんは

「さん」などつけていないので、橋爪と言いますが、私の感想は「橋爪は橋爪で頑張ってくれ」と（笑）。橋爪が書くものはいつも私にとって刺激的で非常に有益なことが多いので「これからも頑張って下さい」と申し上げるしかないのですね。

皆さん、もし驚いたとしたら、例えば「現場の社会学の原理」という本を読みますと、私のうろ覚えだと、宗教というのはわけのわからない前提で人々が行っている行動様式というような定義なのです。普通の学生が読むと「これは何だ」と申しますけれども、要するに宗教が持っている前提というのがいったいわけがわかるかということ橋爪さんは言っているんだと。少なくとも、私はそこどころだけを読んで、本当に人類学者として、宗教というのはわけのわかるものとして説明しようとしている。この態度はよいのかというように使うわけですね。他にもいろいろあるのですが。

質問は1つです。ヴァイトゲンシュタインというのは西欧ローカルではないのか。

【橋爪】はい、答え。だれだってローカルなのです。ですから、先ほども言ったように絶対と相対は相対的なのです。ですから、ローカルの中でどれくらいローカルでない要素で抽出しようと努力したかということなんですが、彼はユダヤ人でいろいろな理由ですべてのシステムからはみ出て、それで無神論です。しかし、宗教的な情熱があって、いろいろな理由でたまたま他のローカルの文化に役立つ材料をたくさん出しているわけです。

【大澤】では佐野さん。

【佐野（経済産業省通商政策局長）】私は行政サイドですが、特に篤さんの話と少しつながるところがあるのですけれども、社会科学と聞いて、社会学というように聞いたつもりはなかったものですから、もうちょっと広い意味での社会科学という言葉でお話をされているのかなど。そのわりには理論社会学とおっしゃったから、哲学に近いのか、何かお話しになっておられるというのは1つの考え方であって、それは大変興味深く聞かせてもらったのです。

その中で何となくいまの議論をずっと聞いていると、やはり業界内でお互いに一生懸命議論されていますね。けれども、われわれにとってみて、業界の外にいる人間にとって、プロダクティブな何らかのセッションがあるという感じがなかなか出てこないで、ちょっとその辺の一言でも二言でもよいから、われわれ業界外の人に対していくつかコメントをいただけないか。

具体的には何を言いたいかというと、私のイメージは、特に経済学の世界で見ていると言うか、私は経済行政をやっている世界で見ていると、経済学というのは一生懸命社会科学でありながら、自然科学的手法をいろいろなところで取り入れようと努力をしてきた。そういう数学を使おうという努力をずっとしてきているわけですね。

先ほど、上野先生のデリバティブスという話がありましたけれども、まさにいろいろなことについて、新しい高等数学をどんどん放り込んでやってみようと思って、うまくいっているかどうかは別としてやっているわけです。なぜ、それが日本でできないかと言うと、実は日本にはそれをちゃんと観測する手法がないのです。観測をする手法とは何かと言うと、日本ではデータの取りようがないのですよ。残念なことにいまのわれわれの経済政策の一番の問題点は日本ではデータが取れない。ところが、アメリカでは200年のデータを全部持っている。ですから、ある意味において、いくらでも演習ができるという仕組みになっているのです。

どういうことが言いたいかというと、これも業界的な世界ですから、ちょっと簡単に申し上げますと、私たちは毎月月例で報告をしたり、いろいろなことをしているのですが、その中でよくわれわれで議論されているのに家計調査というのがあります。家計調査というのはどうやっているかと言うと、サンプリングをいろいろな形で普通の人からサンプリングして、言ってみれば、消費者サイドから調査をすること、需要サイドから調査をすることが供給サイドからのデータ、統計データだけを持つよりも、より客観的な経済の実

態をわかるはずだと思っているわけです。それで毎月調査をしているわけです。

ところが、家計簿と同じことを皆やらされているわけです。ところが、協力ベースでやっているものですから、坂東さんのところでやっているのですが……。

【坂東】私が担当課長です。

【佐野】私はもしかすると説明を間違えて……。簡単に説明すると、どうなってしまったかと言うと、昔は皆家計簿をつけていたわけですね。この頃は家計簿をつけなくなったから、どうしているかと言うと、地方公共団体が責任を持ってやっているものだから、地方公務員に頼み始めたわけですよ。そのために公務員の比率がどんどん……。本当にそうであるかどうかは知らないから、坂東さんは説明しないほうがよいと思うのです。ここも反論するのです。基本的には上がっていると。もっとジョークを言うと、地方公務員は「もう嫌だ」と言い出していて、国家公務員で地方に出向した連中にやらせているという説があるのですよ。これは本当かどうかは知らない。

ところが、非常におもしろいことが起こったのは、漫画チックに言っているだけけれども、実は2年前の12月に、公務員だけ、特に国家公務員だけボーナスが落ちた時期があるのですよ。そうしたら、家計調査はそのときだけ消費行動がマイナスに出ているのですね（笑）。事実そう出たんですよ。ところが、全体の民間のボーナスは上がっているのです。非常に変な結果が出ているのです。それくらいバイアスがかかる数字が……。

私の言いたいことは……。別に皆さんにこんなことを外で言ってほしいと言っているのではなくて（笑）、問題はいまやっているわれわれのデータ、調査ということが本当にきれいに調査されて、信頼のできるものになっているのかと。医者で言えば、薬をドカーンと飲ませて血圧を測ってみて、いろいろなことをやってみた結果と、そのタイムラグ、それが本当に全体の効果が合っているのかというのが、いま医者にとっていま一番の問題なのですが、社会科学にお

いて、私たちのやってることは本当に合っているのかというのは、実際われわれ経済学とか、経済政策をやっている連中にとっては非常に重要な事件なんですよ。

私は社会学がどうされているのか知りませんが、いったい社会学でおやりになっている……。理論経済学というのが別にありますから、理論社会学はちょっと違うのかもしれない。ただ、一般的にいろいろな個別をされているときには、船曳先生のようにいろいろな方にインタビューをされているとか、いろいろな手法はあると思うのですけれども、いったいどうやって社会学というのはどこが社会の事実だとおっしゃるなら、何をセンシングされて、どんなセンシング手法でおやりになっているのでしょうか。世論調査とか、いろいろありますよ。しかし、いったい何でセンシングされているのですかと。

もし、センシング機能がうまくいっていないのなら、いま私が非常にジョークのようなことを申し上げましたが、ある分野において、そういうことがうまくいっていないのなら、社会として、それを直しておかないと、実を言うと、いつまで経っても事実と言うか、実態の世界と理論的な世界というのが統合されてこないし、日本をサンプリングする方法がないのではないかという気が私はしています。

そういう意味においては政治学でも同じ世界で、きょうもまだガタガタやっていますよね。麻生太郎が何を言った、言わないと。そういう世界がどんどん起こってしまうと、事実が何であるかがわからなくなるということを、どうやって止めさせればよいのかということについて、実は日本の社会科学はこれでよいのかというところの1つのポイントなのかなと思って、業界外の人として聞いていたのですが、その辺はどのようにお考えなのでしょう。別に理論社会学の先生にお聞きしているわけではないのですけれども、どなたか、そういうことにお答えいただければ、大変ありがたいと思います。

【大澤】これはおっしゃるようにバイアスのあるデータしか取れないというのが現状だと思います。つまり、一応ランダムサンプリングするのですけれども、大体元の母集団がなかなか簡単に確定できなくて、調査として一番やりやすいのは村落調査みたいなものですね。皆がすごくオープンで、そういうところでは比較的あれですけれども、例えば、若者の意識調査とかやりますね。若者の意識調査で例えば統計学的にかなり厳密な手法で計算したりしますけれども、実はサンプリングは実に曖昧なもので、どういう母集団か、どういう方法でランダムサンプリングしているか、非常に怪しい。

ですから、おっしゃるように私の知る限りではほとんどの社会学の実証的データはかなり怪しいですね。つまり、そこで使われている統計手法の厳密さと、そもそもそのデータのバイアス……。例えば、よくやるのはアンケートをするために手紙を出して、回収率何とか%とやるのですけれども、大体アンケートに答える人のメンタリティというのがあるのですよ。そこにすでにバイアスがあるのですね。けれども、アンケートに答える変わった人を調査しようと思っても、絶対これは調査できないですね。「あなた、アンケートに答えますか」という質問を入れたとしても、その答えは1つしか返ってこないから、結局その辺にバイアスがあるのですけれども、なかなか非常に難しい困難なものが現状だと思いますね。そんなところですよ。

ではあと川勝さんと西垣さんで終わりにします。

【川勝（国際日本文化研究センター教授）】私は橋爪さんのお話を大変おもしろく聞いたのです。ただ、社会科学とか、理論社会学とか、あるいは社会学というものを必ずしも前提にしなくてよいなという感じがあります。すなわち、これはご自身の言説に責任を持って、自己陶冶のために、まさに人生生きることが学問であると。いま橋爪学を聞くということですよ（笑）。それはなかなか大変なことだと思うのです。

どういう意味かと言いますと、恐らくソーシャルサイエンスとい

う言葉は、実質日本に入ってきたのは20世紀ではないかと思いません。19世紀末ぐらいにドイツで使われたかもしれませんが、実態としては19世紀にはあったとしても、経済学なり、工学なり……。しかし、そういうものを19世紀後半以降入れてきましたね。入れてきた結果、業界ができた。

同時に入れ切って、元にある現実と社会科学のいろいろなコンセプトがヨーロッパと1対1の関係でなっている。非常にわかりやすい話です。日本に来ると、それが違っているから、いろいろな現実と、あるいは日本の思想との軋轢が生じるという話なのですけれども、一方、向こうから入れているのは日本人ですから、そのコンセプトが現実をつくるというのがありますね。

ですから、ずれが生じると同時に、実は現実がつくられていくということがあると思うのです。そのようにしてきて、まさにコンセプトが現実をつくってきつつ、できあがってきたところで、今度それを分析するとき、社会科学的な言説というものを使うのが有効かどうかと。

言い換えますと、橋爪さんは社会科学をもっと精緻にしていこうと言われてはいますが、実は社会科学を入れ切った、また自然科学をそれなりに消化した。あるいは人文科学を入れたと。入れ切った中で今度どのように考えるかということではないか。

言い換えますと、社会科学というものを前提にしないでよいと言いますか、それを入れ切ったところで今度は考えるとなれば、ご自身の立場から考える以外ないと。そうすると、言ってみれば、使える用具は日本にもあれば、向こうにもあるので、自由に使うと。基本的には比較的なタームになるとは思いますけれども、いわばヨーロッパ地域学としての社会科学、自然科学、人文科学というものを実はわれわれが対象にできるようになったと。日本の中に入ってきた、そういうヨーロッパ的な知的体系のすべての体系と、それを入れている日本の現実と、そうしたものも合わせて対象にできるような、そういう地平にしていると。

そこで自分の言説に責任を持って、自己投影しつつ生きていることと、学問をすることが一体になるような学問をしていくということしかないと言われるのは、まさに入れ切った段階を示している。日本の150年間を社会科学を入れ切ってきた、その地平をみごとにこの1人の人間が体現しているということだと思って聞いたのですけれども。大変啓蒙されました。

【大澤】西垣さん。

【西垣（東京大学大学院情報学環教授）】いままでの皆さんのご議論を聞いていますと、これは橋爪さんの議論というより、このテーマ、つまり「日本の社会科学はこれでいいのか？」というものすごいテーマがあって、それについて、橋爪さんがおっしゃったことが、もちろん抽象化しなければいけない、いろいろな概念モデルをつくったわけですが、そここのところいろいろ皆さんがお考えになっているところとか、さまざまずれが生じる。その質問が非常に多くて、そういうことに関しては私ももちろんあるわけですが、それを言い出していたら、無限の時間がかかるという気がするのです。

ところが、一方、ご議論そのものについては私にとっては非常に明解でした。どうもありがとうございました。さすがだと思いました。ただ、私としては少し学問的に聞きたいことがあって、つまり最終的にはいろいろな問題を言語ゲームというところに、ある意味では収斂させていかれたのかなという気がしました。

ところが、言語ゲームというのは少なくとも私の知っている限りではヴィトゲンシュタインという人は最初は、ご承知の通り、論理哲学論法というところから始めて、小さな言語が必ず意味の由来には必要ないと。それを組み合わせて計算していけば、対象をちゃんと言い当てることができるというところから出発したにも関わらず、言うまでもなく、後期になって、黄金と言うか、哲学探究になって、それはできないんだというようなところにたどり着いたわけですね。

ということは、そういうことで状況というものにインディペンデ

ントなものがあるということを前提とした、ある意味でのいわゆるヨーロッパ的という言葉を使ってよいかどうかわかりませんが、そういう学問的な伝統というものに対しての一種のアンチテーゼだったのです。

そのような概念装置というのを、このように状況ディペンデントな言葉で学問が成り立つというところに持ってくるというのは1つのアイデアなのですが、そこがどのように……。はっきり言うと、私としてはそれでうまくいくのかなと、ちょっとそこところが非常に興味があるところでもあり、疑問でもあるのですよ。ここではとても時間がないと思いますけれども、もう少し、2、3分でもそこについての本質的な部分を教えていただきたい。

【橋爪】難しい質問ですね。言語ゲームというのは定義から出発できないという特徴があるわけですね。定義から出発する場合には言葉は指し示すこういうものがあって、とにかくこれが土台になって、それが確実だから、その先が確実で、さらにその先が確実だと展開していくという構成をとるのですけれども、本の書き方もそうだし、概念上もそうなのですけれども、言語ゲームの後期のヴィトゲンシュタインの説は始まりも終わりもない。いきなり途中から始まって、話が進んでいく。映画館の途中から入ったみたいなものです。だれが主人公かとか、どういう話なのかということとをだんだん理解していきながら、形式上の終わりがきて、また始まってということなのです。

でも、それは確信犯として意識してやっていくわけで、世界の構造がそうなっているのではないかと。言葉の使い方がそうなっているのではないかと、そう言わないで示す方法だと思ったのです。

ですから、これがそもそもモデルに使うという段階で彼の精神を裏切っているということを私は自覚しているのですけれども、これは説明をするのではなくて、彼がパフォーマンスとして見せたものなので、これをモデルに使うというのは彼の魂を汚すような行為な

んですけれども、私としては最もよいものをモデルにしようと思えば、彼のものをモデルにすることになる。ここで大きな屈曲があります。何か失われている。でも、他のモデルでは使えない何かがあると思うのです。

私がちょっとやってみたいと思っているのは、ヨーロッパの文脈を十分はずれているもので、いままでの社会科学に比べてどんな社会的現実にも十分近いのではないか。それを仏教でやってみて、ある程度うまくいった。ということは、他のものもかなりのものうまくいくのですけれども、もうちょっと続けてやってみたい。

【福川（電通総研研究所長）】きょうは大変ありがとうございました。20世紀を総括して21世紀を展望しようということで、ずっと今年続けてきまして、今回第9回ということで、今年度、2000年度の締め括りということで、非常に格調高いお話だったと思います。私も実はこの分野もきわめて知識がないのですが、非常にきちとした体系ができて、私も十分理解したわけではありませんが、非常に教えられるところが多かったと思って、先生に感謝しています。

私が「日本の社会学はこれでいいのか？」という設定をしたときに、1つは社会学であるか、社会科学であるか。そういう中で体系的に、理論的に、実証的にある優れた学問的なシステムができるということが1つと、もう1つ、私が期待していたのはインターディシプリナリーと言うか、他の分野との関係をどのようにお考えになるのかという点に実は興味があったわけです。

先生がおっしゃるように、業界を破壊し、社会科学、社会の往復運動を確立することということになってくると、例えば西垣先生のご専門のデジタル化ということが起こったときに、いろいろ社会の合意形成の仕組みも非常に変わってくるし、人間対人間の関係まで非常に変わってくるだろうと思います。黒田先生のご専門の、例えばもう少しヒトゲノムの解明だとか、ヒトゲノムだとか、あるいはまたクローンだとかいうことが出ていったときに、いったい神とか理性とか人間というものにどのような影響を与えるかというのはい

